

南壁が短い長方形のものがほとんどである。また、黒色土中に構築されたものもかなりの数にのぼる。

なお、各時期の遺構数は、現在確認できた数であり、今後の資料整理により変更があることを付け加えておく。(五十嵐)

IV 遺構と出土遺物

(1) 住居址と出土遺物

第12号住居址

弥生時代の住居址は調査区全体に散在するが、本址は、A区の東南、29—25、29—26区に位置する。本址は、東壁を第15号住居址（国分期）に切られ、また住居を南北に古墳時代前期の第1号方形周溝墓によって切られている。

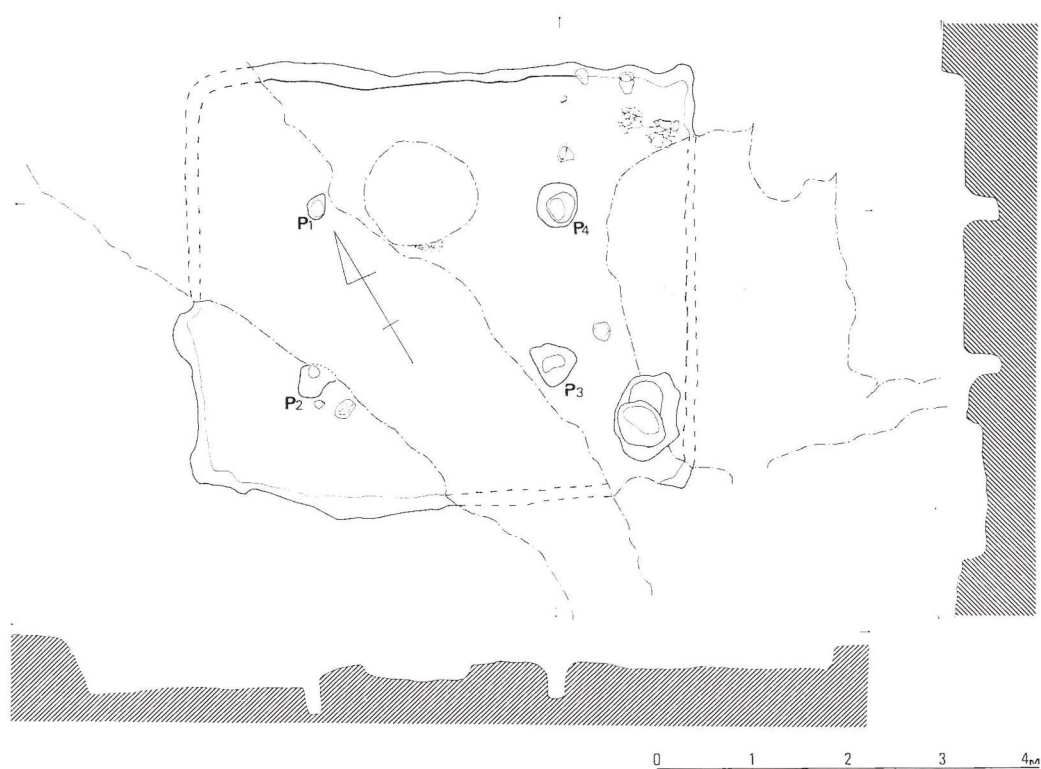


図6 第12号住居址実測図

長軸の方向はN-48°Wで、平面プランは5.2m×4.8mのほぼ長方形を呈している。壁は東壁が第15号住居址との重複関係により残存していないので、北壁、西壁、南壁の一部を残すのみであるが、各壁とも壁高は25cm程で、やや傾斜をもって立ち上がっている。床面は、ほぼ平坦で、全般的には縦縞であった。

住居内の施設としては、ピット5本と炉があげられる。第1方形周溝墓に接して大きな土壇が存在するが、後世の掘り込みと考えられる。

柱穴は、P₁～P₄までの4本が確認できた。残りのピットは貯蔵穴と考えられるが、用途不明である。深さは、P₁49cm、P₂23cm、P₃40cm、P₄38cmで、若干の差異が認められる。

炉は明確ではないが、住居址中央部やや北西の大きな土壇の縁に焼土が残存しており、他の部位に焼土の残存が確認されず、この土壇により、炉が切られていることが考えられる。

住居覆土は、黒色土層と暗褐色土層の2層にわかれ、両層ともにローム粒子を多量に含んでいる。

遺物は、北壁東側に倒れかかった状態で甕が1個体（図7-2）、この甕の前に、つぶれた形で甕と壺あわせて3個体（図7-1、3、4）が出土した。その他覆土・床面に破片として多数検出された。

（飯塚）

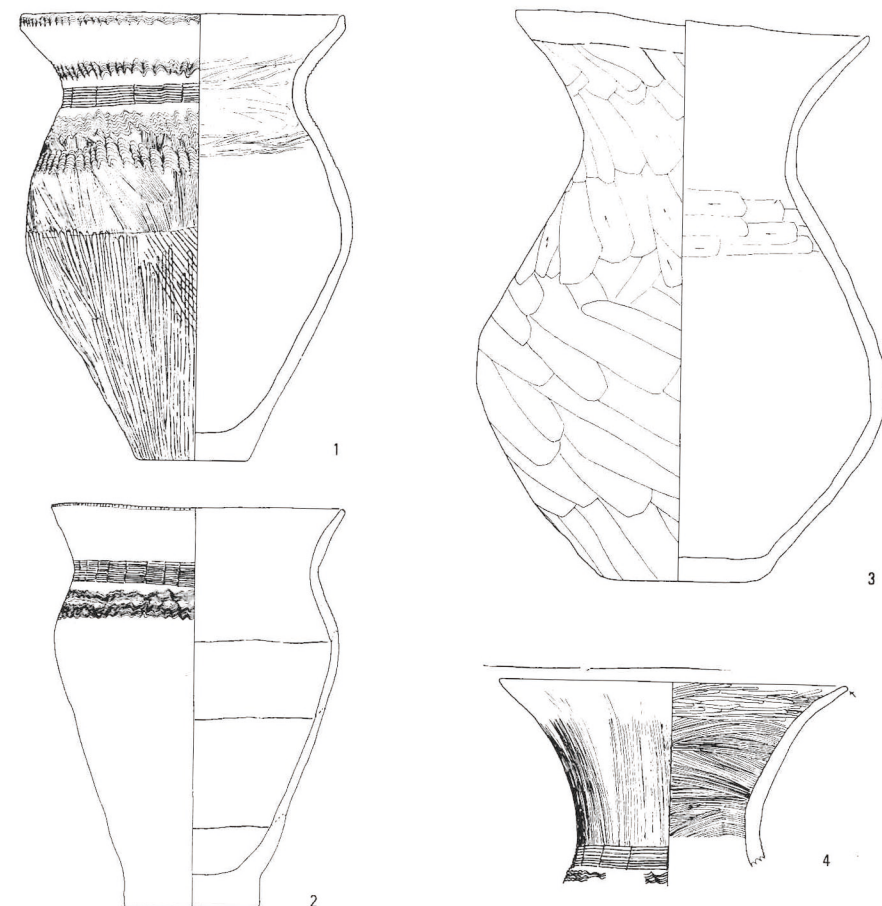


図7 第12号住居址出土土器実測図



写真4 第12号住居址遺物出土状態



写真3 第12号住居址全景（西より）

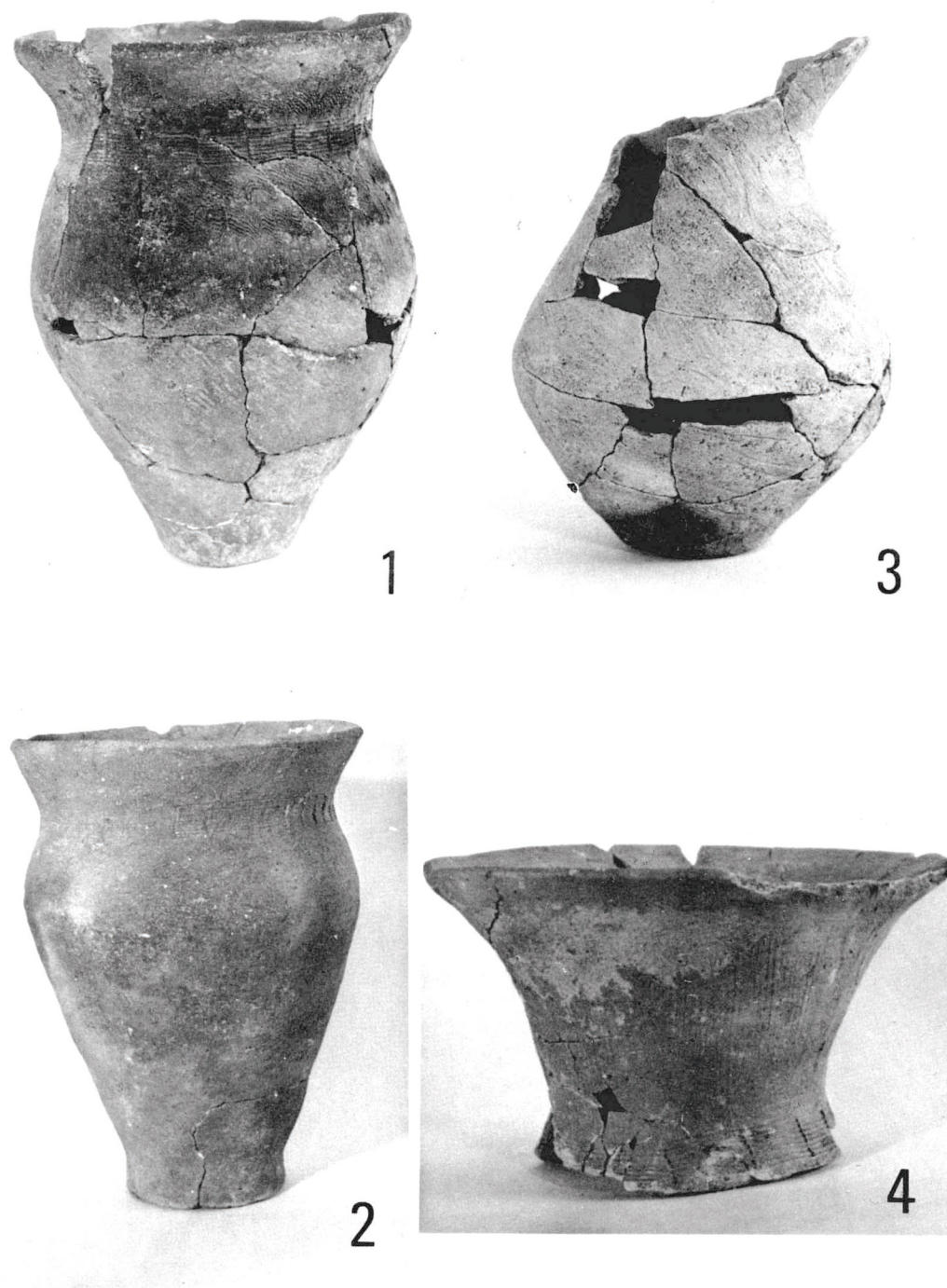


写真5 第12号住居址出土遺物

出土遺物

器種	図版	法量	形態の特徴	外面の技法の特徴	内面の技法の特徴	備考
甕	図7-1	口径 16.8cm 最大径 18.2cm 器高 23.5cm	・最大径を胴上部にもち、緩やかにくびれる頸部から口縁部は外反する。口縁端部は直立している。	・上半部はタテハケメの後櫛描文、口縁端部は軽いヨコナデ ・下半部は粗いナナミハケメの後、タテヘラミガキ ・櫛描文は口縁端部は櫛目4本、他は8本 ・口縁端部以外は、籠状文を最初にして上下へという順でいずれも右回りに描いている。 ・籠状文は、1回単位の押し引きを21回。	・ナナメヘラナデの後、頸部ヨコヘラミガキ ・口縁端部ヨコナデ	・赤褐色 ・砂粒を多く含む ・外面胴上半及び内面口縁部上半にススが付着
甕	図7-2	口径 15.4cm 最大径 16.0cm 器高 21.2cm	・胴上部に最大径をもち、口縁部は直に外反する。	・胴下半タテヘラミガキ、頸部胴上部は櫛描文 ・櫛描文は櫛目11本で、3段の文様は籠状文が最初で下へ向かって施文 ・籠状文は、1回単位の押し引きを38回 ・波状文は振幅が小さい	・胴部ヨコヘラミガキ	・明褐色 ・砂粒を含む、赤色粒、石英粒少量 ・肩部と反対側の胴下半に黒斑
壺	図7-3	口径 18.6cm 最大径 21.4cm 器高 29.7cm	・胴中央に最大径をもち、胴部はそろばん玉状の形態、口縁部は外反し、口縁端部はやや内湾しやや受口状	・胴上半部はナナメヘラケズリ ・口縁部・胴下半部はコバ状工具によるナナメケズリ ・口縁端部ヨコナデ	・胴上半部ヨコヘラケズリ、他はナデ	・白褐色 ・砂粒を含む、長石・赤色粒少量
壺	図7-4	口径 18.0cm 器高 10.7cm	・大きく外反する口縁部	・細かいタテハケメの後口縁端部はヨコナデ、頸部は櫛描文 ・櫛描文は櫛目8本で、籠状文は1回単位の押し引きを17回	・細かいヨコハケメの後、口縁端部はヨコヘラミガキ	・暗茶褐色 ・細砂粒含む

小 結

最後に、住居址の平面プランと遺物についてふれたい。

本址の平面プランは、5.2m×4.8mの長方形で、弥生時代後期前半に多い比率である。⁽¹⁾

県内の弥生後期の住居址は、長方形プランをとるものが多いが、鈴ノ宮遺跡では、小判形プランや、台形プラン等もあり、今後の遺物の整理で細かい時間差もでてこよう。この他に、住居址の規模は大小バラエティーに富み、村落構造を知るうえで興味深い。

遺物は、4個体分図面で表わした。他に出土しているがいずれも小破片である。

1の甕は、胴上半のみススの付着が観察できた。おそらく、炉中のビットに胴下半を埋めたか、灰などで胴下半を覆ったりしたものとして推察した。残念ながら本址の炉址は、新しい土坑によって破壊されて確認できなかった。しかし他の住居址では、炉中にビットが存在する例もあった。

この土器群の時期は、1・3に認められる受口状口縁の名ごりや、壺にみられるくびれの長い長頸の形態などから弥生後期前半に位置づけられる。

当地域で、前代の代表的型式である竜見町式に後続する土器群であろう。
 本遺跡の弥生時代の住居址は、ほぼ2時期以上に分類できるが、その古い時期に比定できる。
 (田口)

註
 (1)平野進一「群馬県荒砥前原遺跡」『信濃』 26—4 1976年

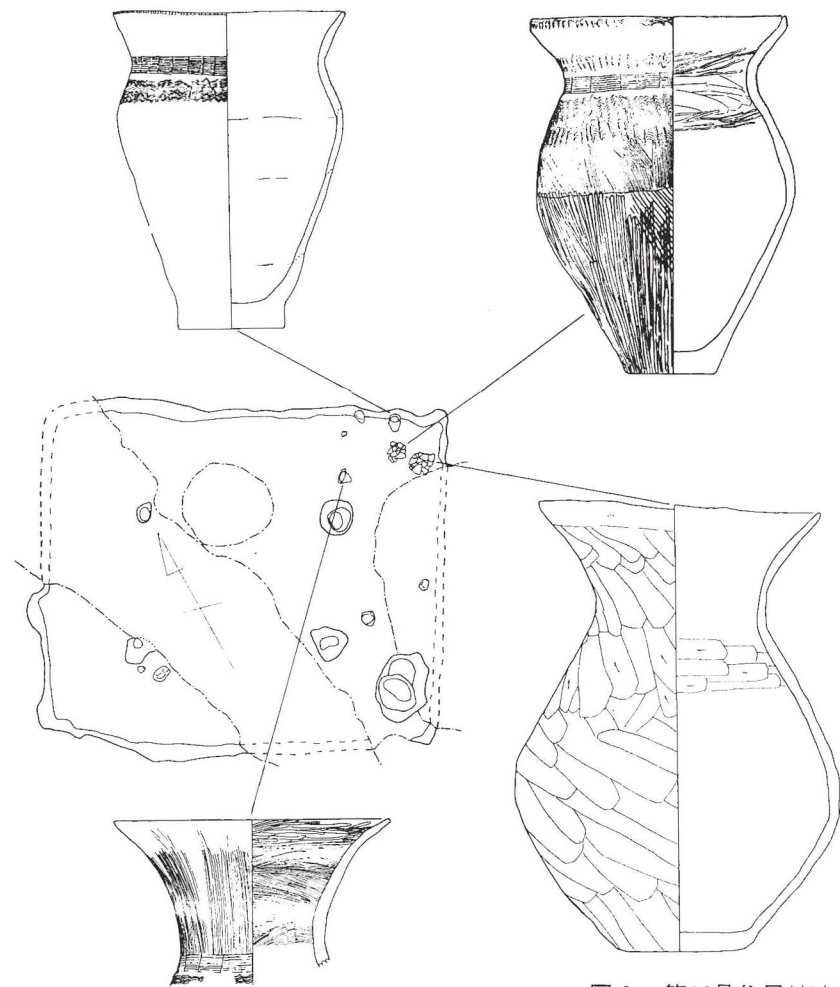


図8 第12号住居址遺物分布図

第48号住居址

A区の北側中央、23—21、24—21区に位置している。
 49号、110号の二基の弥生時代後期の住居址と、一基の弥生時代の遺構を切っている。さらに47号住居址に切られ、北側では、大きく土壇に切られ、西側部分は、平安期の遺構により、大きく破壊されている。遺構内部も、古銭を出土した中・近世遺構によって切られている。

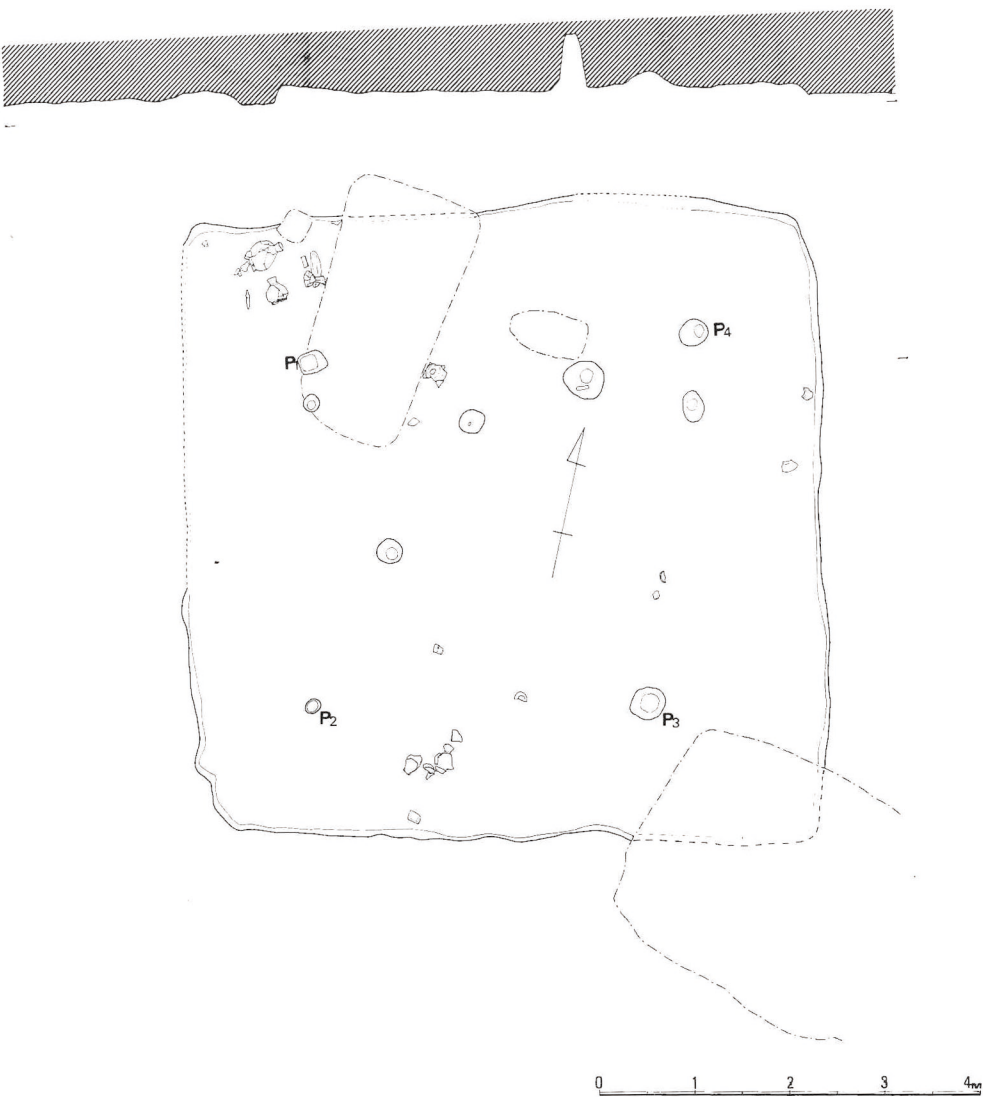


図9 第48号住居址実測図

南北6.5m、東西6.3mの、ほぼ方形プランを呈しており、床面積は、ほぼ40.95㎡である。

炭化材が床面に多く検出され、火災により廃棄されている。このため、比較的良好な状態で遺物が出土している。

ピットは、住居址内で、9基検出したが、本址に関係すると想定できるのは、P₁、P₂、P₃、P₄の4本で、支柱穴と推定する。

炉址は、明確には検出できなかった。床面は、あまり堅くはなく、多少の凸凹もあった。

遺物の出土状態（図12）

床面の遺物は、大きく3つに分かれて出土している。

1つは、南西の隅の一群で、台付甕が2個体、壺1個体で、1mの範囲であった。甕はどちらも破損していたが、破片は、集中していた。

1つは、北隅の一群である。台付甕2、壺1、高杯1、小形丸底壺1の土器群の他に、鉄剣の出土が特筆される。台付甕2個は、ほぼ完形であった。壺、高杯は、長方形土坑で切られた時に破損したようである。また、他にも、この土坑によって欠落した遺物もあるものと考えられる。

1つは、中央から東にかけてのもので、完形のものはない。この一群は、小形の土器が多く小形壺や、鉢によって形成されている。

（田口）

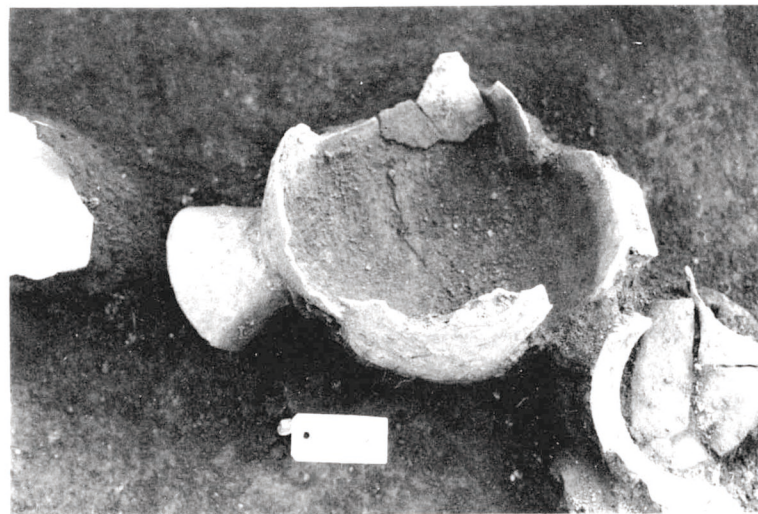


写真6 第48号住居址遺物出土状態（No.1）

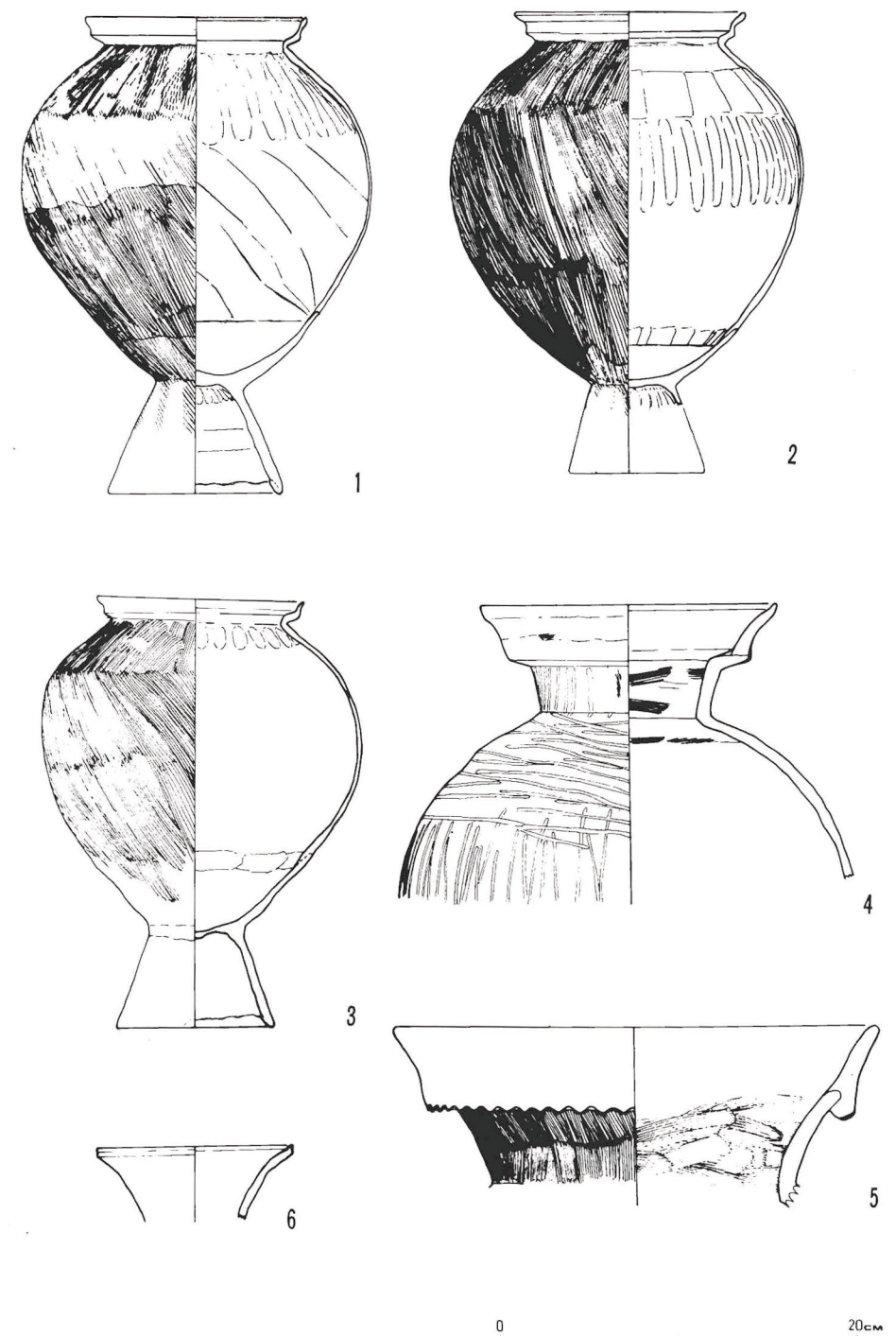
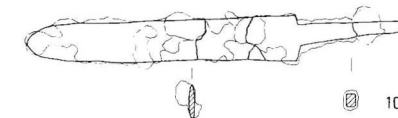
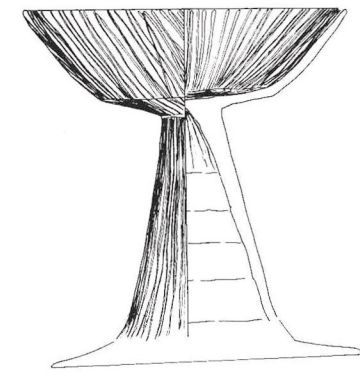
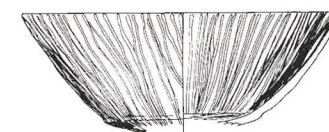
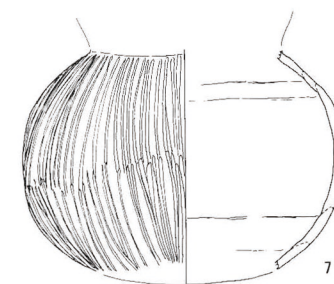


図10 第48号住居址出土土器実測図(1)



0 20cm

図11 第48号住居址出土遺物実測図(2)

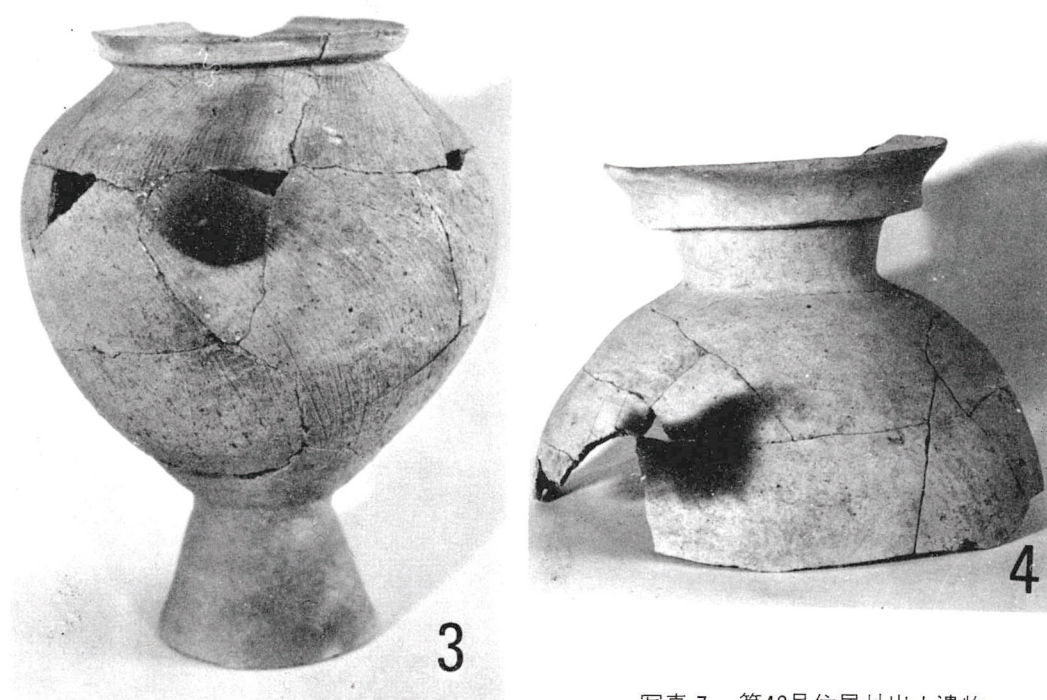


写真7 第48号住居址出土遺物

遺物

器種	図版	法量	形態の特徴	外面の技法の特徴	内面の技法の特徴	備考
S 字 甕	図10-1	口 径 12.4cm 最大径 19.8cm 器 高 26.9cm	- 球形に近い胴部で最大径を胴中央近くにもつ。台部は大きく外反 - S字状口縁 - 台端部折り返し	- 胴下半は3段の左上ナナメハケメ・胴上半二重に右上ナナメハケメ - 台部左上ナナメハケメの後、指頭による磨り消し・口縁部ヨコナデ	- 胴上半ユビナデ及びオサエ・胴中央ナナメヘラナデ・胴下半回転ヘラナデ - 台上部指によるオサエ、下部ヨコヘラナデ	外面胴下部ススの付着、内面胴中央部有機物付着
S 字 甕	図10-2	口 径 13.1cm 最大径 20.1cm 器 高 26.3cm	- 無花果形の胴部で最大径は胴上半 - S字状口縁 - 台部欠失	- 胴上半二段の左上ナナメハケメ・胴上半二重の右上ハケメ - 台部左上ハケメの後指頭による磨り消し・口縁部ヨコナデ	- 胴上半タテユビナデ及びオサエの後、ヨコヘラケズリ・胴下半接合部ヨコヘラケズリ - 台部ユビによるオサエ・口縁部ヨコナデ	- 外面の胴と台の接続部より上はススが付着 内面、口縁部段部より上はススが付着、胴部には有機物付着 - 淡褐色 - 砂粒少量
S 字 甕	図10-3	口 径 11.7cm 最大径 18.1cm 器 高 24.5cm	- 丸味をもった胴部で、胴上半に最大径をもつ、1・2の土器に比べ器壁が厚い - S字状口縁、口縁端部尖りきみ - 台端部折り返し	- 胴上半右上ナナメハケメ・胴下部二段の左上ナナメハケメ - 胴と台の接合部の上下ハケメなし - 口縁部ヨコナデ - 胴部のハケメの調整具は、1・2と異なる調整もやや不規則	- 口縁ヨコナデ - 胴上半ユビのオサエ、中央タテナデ - 胴下半の接合部はヨコヘラケズリ・胴最下部ヘラナデ - 台部ナデ	- 黄褐色 - 砂粒 - 長石粒含む - 黒斑がある
壺	図10-4	口 径 16.7cm	- 球形の胴部 - 口縁部は有段である。下段はやや外反ぎみに直立し、上段は外反して開く、口縁端部は直立ぎみにわずかに立つ	- 口縁上段ハケメの後ヨコナデ・口縁下段タテハケメの後、タテヘラミガキ - 胴部ハケメの後ヨコヘラミガキ、下部ではタテヘラミガキ	- 口縁上段ハケメの後ヨコナデ・口縁下段ヨコハケメ - 胴部ヨコハケメの後、ヨコナデ	- 外面淡褐色 - 内面いぶしのため黒色 - 小砂粒少量含む

壺	図10-5	口 径 27.0cm	・複合口縁	・口縁上段ハケメの後ヨコナデ ・口縁下段二段のハケメで上がナナメ、下がタテ	・口縁上段ハケメの後ヨコナデ ・口縁下段ヨコハケメ	・赤褐色 ・砂粒を極めて多量に含む ・口縁部の1/2
壺	図10-6	口 径 11.0cm 器 高 4.2cm	・外反して開く口縁部、弱い二段となる。 ・口縁端部は直立し横は沈線状	・ヨコナデ	・ヨコナデ	・黄褐色 ・砂粒含む ・口縁部1/2
壺	図11-7		・やや下膨れの胴部	・二段のタテヘラミガキ	・ナデ	・暗褐色 ・砂粒含む ・胴部1/2
高 坏	図11-8	口 径 17.0cm 器 高 17.4cm	・坏体部は、やや内湾ぎみに開く、坏底部は平坦 ・脚部は、直線的に開く、先を欠失しているがラッパ状に開くものであろう	・坏体部左上ナナメヘラミガキ・坏底部一方方向ヘラミガキ ・脚部、タテヘラミガキ	・坏部、タテヘラミガキ ・脚部、上部はしほり痕を残し、その下はヨコヘラケズリ	・淡赤褐色 ・砂粒 ・赤色粒含む ・ヘラミガキは暗文
高 坏	図11-9	口 径 17.0cm	・坏体部は内湾ぎみに開く	・左上ナナメヘラミガキ	・坏体部はタテヘラミガキ ・坏底部は、一方方向ヘラミガキ	・淡赤褐色 ・微砂粒含む ・赤色粒少量含む

鉄剣（図11-10）

全長19.7cm、刃部長14.4cm、茎長5.3cm、刃幅2.4cm、を計測し、短剣である。三ヶ所で折れており、錆化も進行しており十分な観察ができないが、一部に剣と平行して木質部が認められ鞘のようである。

小 結

今回、報告した遺物が本址の全ての遺物ではなく、未整理のものも、1～2点あり、不十分な資料となってしまったが遺物についてすこしふれておきたい。

台付甕はいずれもS字状口縁をもつものであるが、1・2と3というように2つに分類が可能である。1・2は外面にススの付着もみられ、内面にも有機質の付着が認められる。特に2は、口縁部内側の色調の相違によって蓋の使用が推定できるが、3には使用の痕跡は認められず、少なくとも長時間火を受けたということは、なかったといってよい。

1と2は、所謂S字甕のB類⁽¹⁾3はかつて筆者が分類したS字甕のC類に類似するものである。⁽²⁾二者の最も大きな違いは、調整具に代表されよう。B類は、S字甕のカテゴリーでは最も普遍的な存在であり、そのハケメ調整は、かたくなに守られ保守的とさえいえる。口縁の形態・全体の器形・内面の指によるオサエ・台部のハケメの磨り消し・台内面の折り返し等々、でも同様のことが指摘できる。

このことは、S字甕の生産が何らかの規制を受けたと推考させるものである。⁽³⁾C類の出現は、従来の保守的で規制された生産体制が、変化し始めた表われであろう。

C類がB類よりも後出的であるが、3は調整具・口縁の造りで変化している反面、器形調整方法等ではB類を踏襲しており、C類のなかでも古い時期に位置づけられよう。

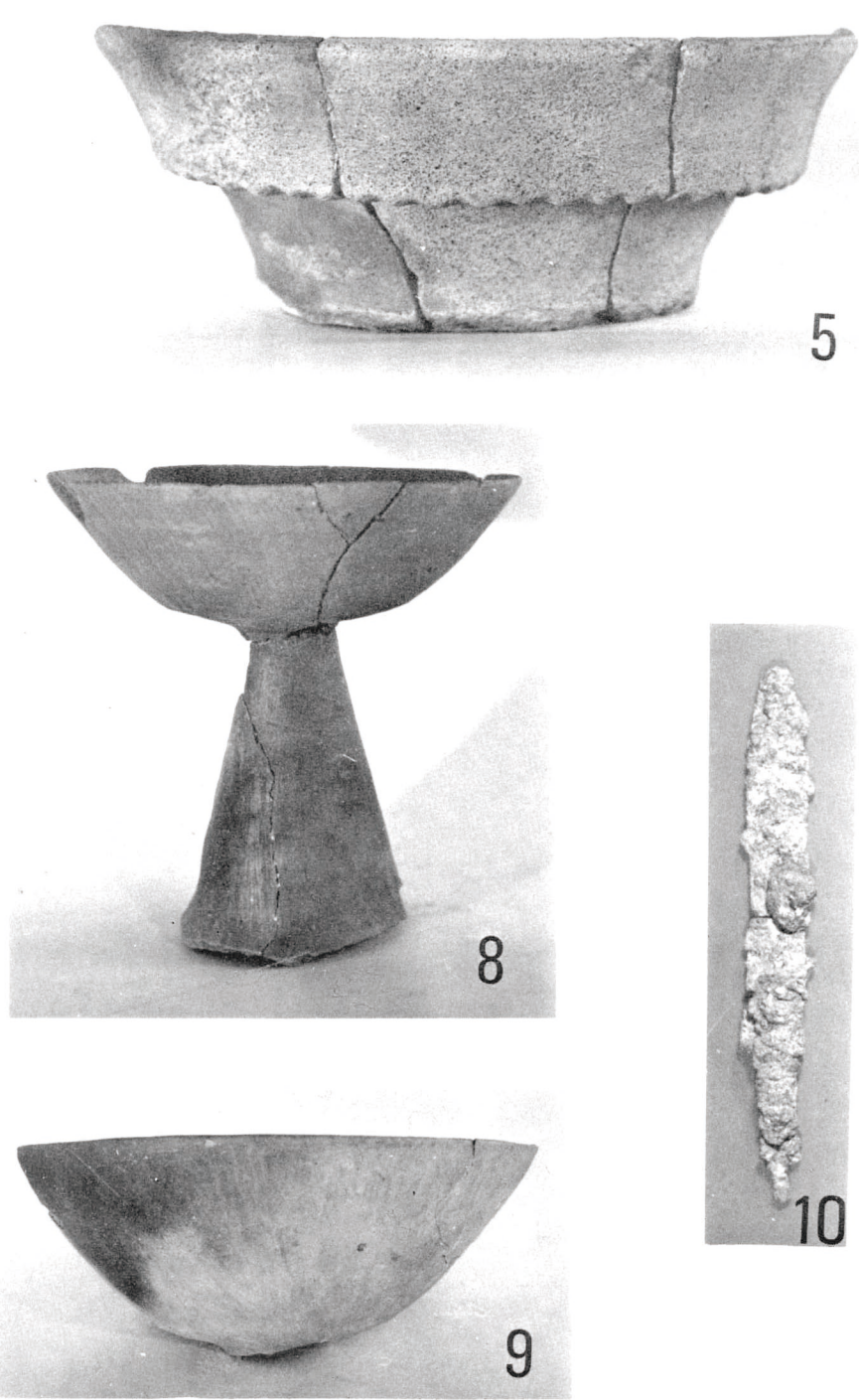


写真 8 第48号住居址出土遺物

さらに注目されるのは8の高坏である。

2段の坏部に直線的な脚部は、石田川式土器の中からは発展しないもので外来的土器である。

4の壺口縁部の退化的様相、5の壺の在存等、総合的にみると新しい様相は、はっきりとする。

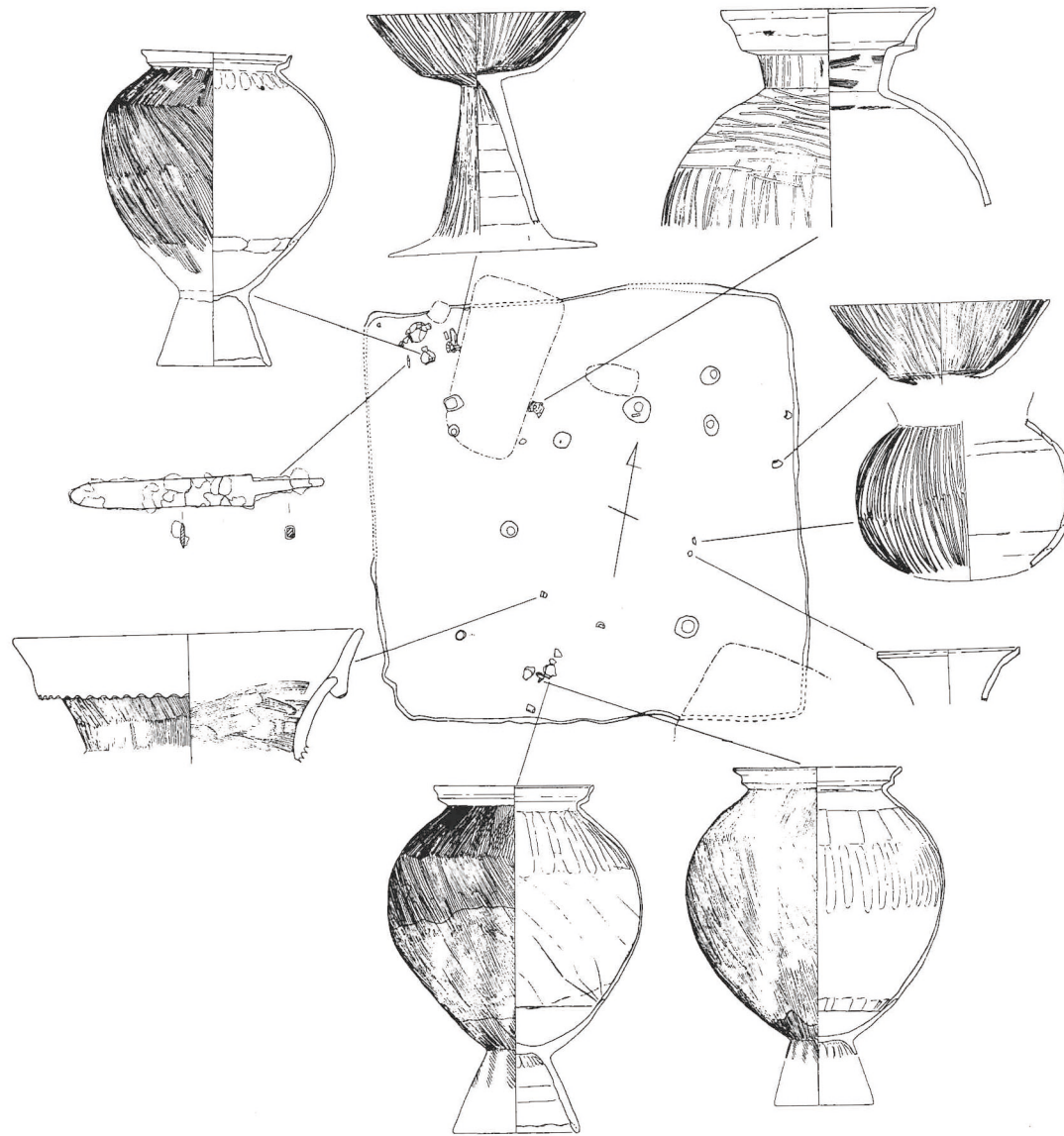


図12 第48号住居址遺物分布図

石田川式土器を3期区分した場合の第Ⅲ期にあたろう。実年代は、5世紀前半にあてると。

(田口)

註

(1) 大参義一「S字状口縁土器考」『いちのみや考古』13 1967年

(2) 田口一郎「塚原遺跡」『いぶき6・7』本庄高校考古学部 1972年

(3) S字襷は、分布圏が畿内から東国まで極めて広大である。しかも、その規格は細部まで統一的に実施されており、その生産体制には政治的背景が色濃いといえよう。その実態は、いまだ不明といわざるをえない。今後は、細かい地域ごとの土器の動態を追求する必要がある。



写真9 第48号住居址遺物出土状態(北隅)

第53号住居址

本址は、A区ほぼ中央、25-23、25-24、26-24区に位置し、第93、54、57号住居址(国分期)と、第56、134号住居址(石田川期)に重複関係にある。3軒の国分期の住居址はローム層中には掘り込まれておらず、本址上に乗っている状態で検出された。南、東壁は、2軒の石田川期の住居址の壁を切って造られていることが確認できたが、床面のレベルはほぼ同一で、床面近くまですでに削平されており、一部を欠くことになった。

平面形は、南北方向に長軸を持つ方形で、規模は5.0m×5.1mで床面積は約25㎡である。

カマドは東壁の中央よりやや南に構築され、カマドを通る軸線はN-66°-Eである。カマドは、第134号住居址の床面をやや掘り込んで造られている。長さは92cmで壁外に46cm張り出し

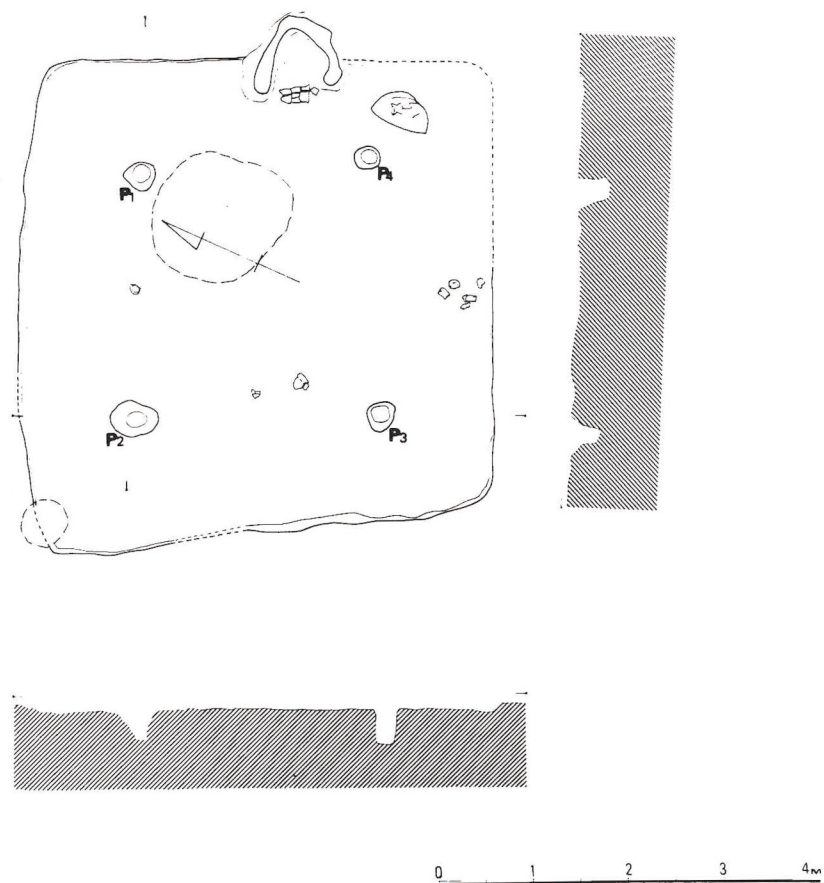


図13 第53号住居址実測図

ており、袖の幅は119cmで、焚き口の幅は50cmである。袖部は粘性の強い灰白色粘土を主体として造作している。天井部分は崩落していたが、焚き口の部分に橋状に渡されていたと考えられる。長甕（図14-1）が南東方向に口縁部を向け、焚き口を塞ぐ形で出土した。

カマド前面の床面には袖部分を構成していた灰白色粘土が堆積しており、カマドの崩壊とともに住居址内へ崩れ落ちたものと思われる。

柱穴は4本確認され、本址のはほぼ対角線上に位置し、相対する間隔はほとんど差が無かった。

深さは35cm前後ではほぼ一様であるが形は一様でなかった。

貯蔵穴は、南東の隅とカマドとの間で、壁から10cm程離して作られている。長径は60cm、短径は38cm、深さは30cmである。中から長甕の口縁部（図14-3）と高坏の脚部の破片が出土している。

床面からの出土遺物は、土師器（坏、長甕）が検出された。坏は南壁中央付近に数個体分（図14-4、6、7）、遺構中央付近では、2個体分（図14-5）が出土している。中央付近で長甕も1個体（図14-2）出土している。小破片のため図示できない個体も存在する。

（五十嵐）



写真10 第53号住居址全景（西より）

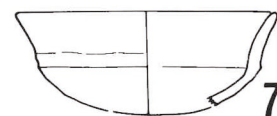
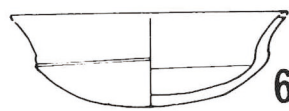
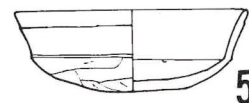
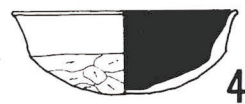
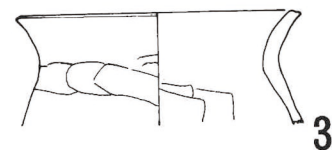
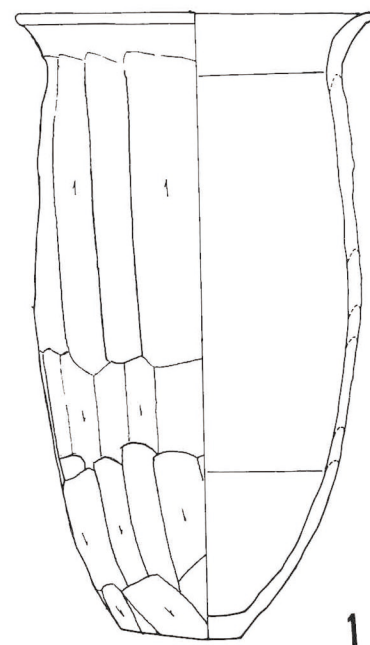


図14 第53号住居址出土土器実測図

遺物

器種	図版番号	法 量	形 態 の 特 徴	外面の調整の特徴	内面の調整の特徴	備 考
長 甕	図14-1 写真12-1	口径 19.0cm 器高 33.7cm	・長胴で胴中央で膨らむ ・外反する口縁は端部で外に肥厚する ・底部は不安定	・口縁部ヨコナデ ・胴上半は下からのタテヘラケズリ ・胴下半は、上からの二段のタテヘラケズリ ・底部近くは、ナメヘラケズリ、底面もヘラケズリ	・口縁部ヨコナデ ・胴上半部ヨコナデ	・赤褐色 ・砂粒を多量に含む
長 甕	図14-2 写真12-2	口径 15.2cm	・強く外反して開く口縁部 ・胴はほとんど径をかえない ・口縁部内面には1本沈線が入る	・口縁部ヨコナデ ・胴部下からのタテヘラケズリ	・口縁部ヨコナデ ・胴部ヨコヘラナデ	・赤茶褐色 ・砂粒を多量に含む ・赤色粒を少量含む
甕	図14-3 写真12-3	口径 15.2cm	・口縁部は外反して開き、端には1本の沈線 ・胴部はやや張りかけている	・口縁部ヨコナデ ・胴ヨコヘラケズリ	・口縁部ヨコナデ ・胴ヨコヘラナデ	・赤褐色 ・砂粒を多量に含む
坏	図14-4 写真12-4	口径 12.1cm 器高 4.4cm	・口縁は外反して開き、端部は外に肥厚する ・底部は半球形	・口縁部ヨコナデ ・底部ヘラケズリ ・口縁部ヨコナデ	・口縁部・胴部ともにミガキ	・外面褐色 ・赤色粒多量に含む ・黒色土師器
坏	図14-5 写真12-5	口径 12.4cm 器高 4.4cm	・やや外反する口縁部に途中に小さい段がある ・底部やや平底ぎみの半球形	・口縁部ヨコナデ ・底部ヘラケズリ	・口縁部ヨコナデ	・褐色
坏	図14-6		・外反する口縁部と半球形の底部	・口縁部ヨコナデ ・胴部ヘラケズリ	・口縁部ヨコナデ	・赤褐色 ・赤色粒を含む
坏	図14-7	口径 13.8cm	・外反する口縁部と半球形の底部	・口縁部ヨコナデ ・底部ヘラケズリ	・口縁部ヨコナデ	・褐色 ・赤色粒多量に含む ・1/3の破片



写真11 第53号住居址カマド



写真12 第53号住居址出土遺物

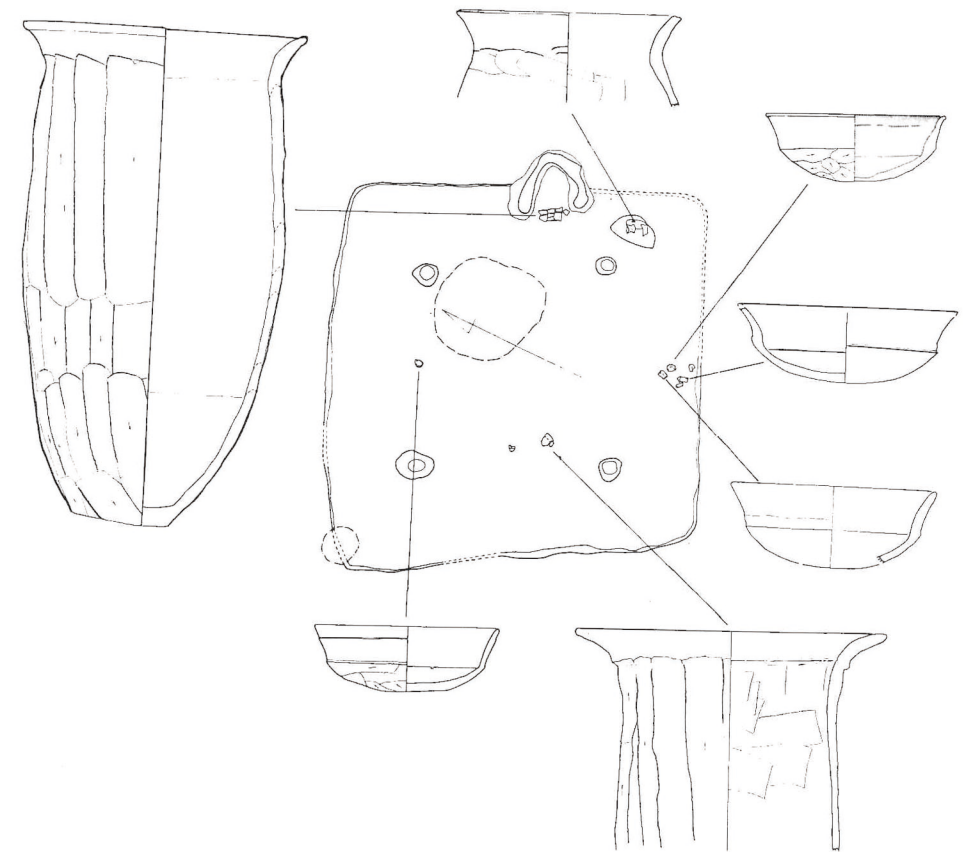


図15 第53号住居址遺物分布図

小 結

本書で報告した土器の他に本址では2～3点の土器が出土しているが、細片のため、図化不可能であった。

長甕は2個体出土している。ともに胴部は長胴化してきているが、まだ若干の丸味を帯び、前代の様相を残している。

坏類は5点出土している。その内1点は黒色土師器である。坏類は、鬼高期の特徴である有段坏で、かなりはっきりとした、段を持っている。口縁部はどの坏も外側に反りをもって立ち上がっている。前代の直線的な立ち上がりから、変化が認められる。

簡単に出土土器の特徴をあげたが、以上のような特徴などから考えて、本址の時期は、鬼高式土器を3期に分類する場合は、Ⅱ期に属し、6世紀後半から末の住居址と考えられる。

(飯塚)

第44号住居址

本址はA区中央やや北側、24—22、24—23区に位置し、第83号住居址（国分期）と第80号住居址（石田川期）に重複している。

規模は、北辺3.10m、南辺2.95m、東辺4.60m、西辺4.55mで、南北に長く、四隅が隅丸状の長方形である。主軸の方向は、N—80°—Wである。

覆土は、ロームブロックと、ローム粒子を多量に含んだ褐色土で、第83号住居址の覆土より明るい色である。本址（図16）は、83号住居址をほとんど破壊し、さらに深く掘り込んで構築されている。

カマドは、第80号住居址の床を破壊して造られており、本遺跡全体の中では残存状態が良好であった。東壁に位置しているが、東南の隅より約30cm離れたところから壁外へ造り出され、長さは90cm程で、平面は馬蹄形を呈している。掘り方は、焚き口部分の東壁を80cm程の幅でこわして造られ、煙道部については明確さを欠くが、掘り方をそのまま利用したものと考えられる。

袖石には隋円形の河原石を使い、東壁より20cm程壁外に置かれている。さらにその奥15cm程のところに同じような石が間隔を持って2個設置されていた。この4個の河原石を包むように粘性の強い白色粘土をまらりに固めている。焚き口は、両複石の間隔が35cm、奥の2個の石の間隔が20cmである。この4個の石の内側の火床と、壁が焼けており、燃烧部と考えられる。燃烧部の中ほどに、支脚として使用していたと考えられる小型で長形の河原石が埋め込んであった。天井部構造は、完全に崩れ落ちているため不明である。

住居内の施設としては他に、南西の隅に貯蔵穴がある。南壁に平行する直径が80cm、西壁に平行する直径が58cmの隋円形で、深さは床面から30cmで、中ほどから須恵器の大甕の破片が1点出土している。

床面はよく踏み固められて堅く、ほとんど平坦であるが、壁際は、柔らかく、若干低くなっている場所もあった。

壁は、ほぼ垂直にロームの中まで掘り込まれており、確認面から約20cmの高さである。

周溝と柱穴は検出されなかった。

遺物は、カマドから、高台付きの坏と、羽釜の破片が10数点出土しているが、残存状態もあまり良くなく、未整理であるため、第2号住居址出土の羽釜と、23—24区出土の碗を図示した。（図17）

（五十嵐）

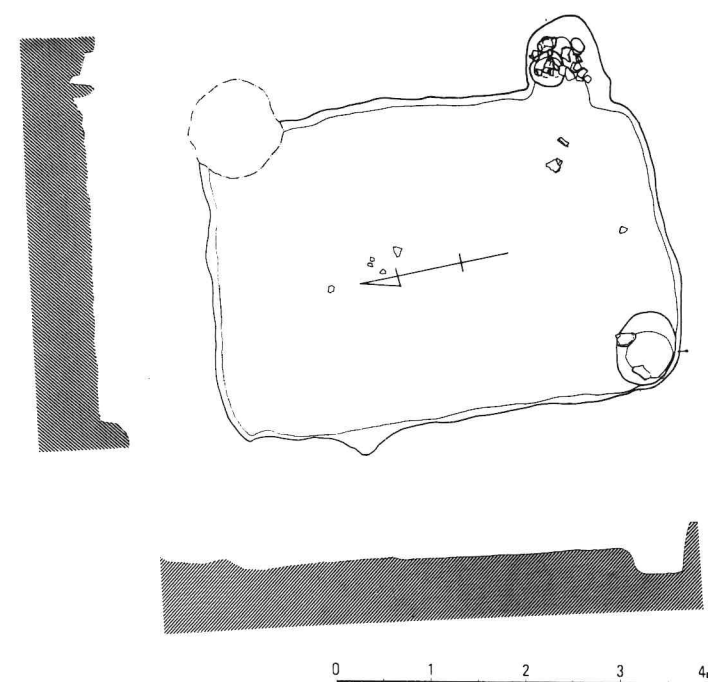


図16 第44号住居址実測図

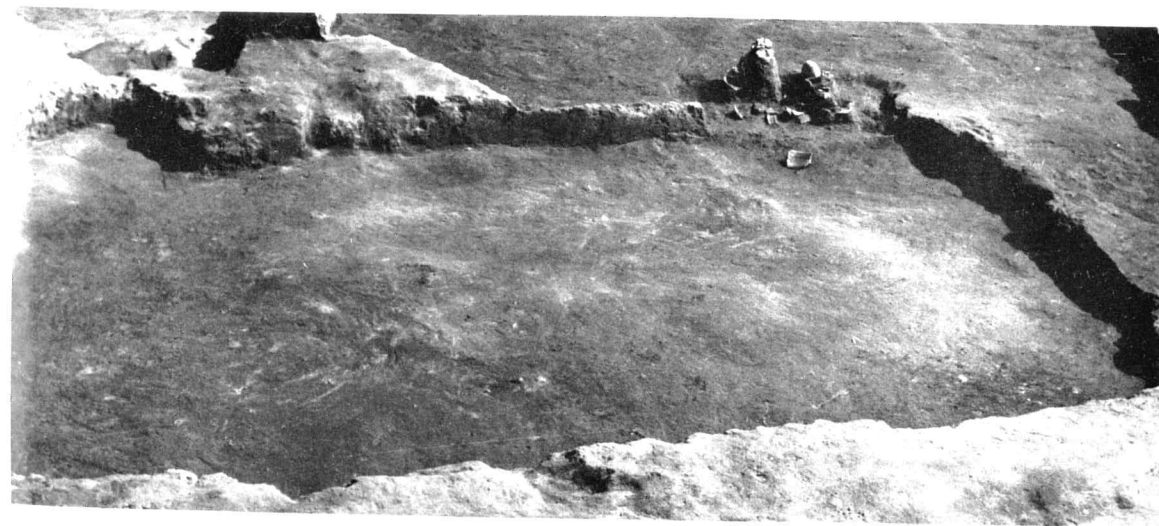


写真13 第44号住居址全景（西より）

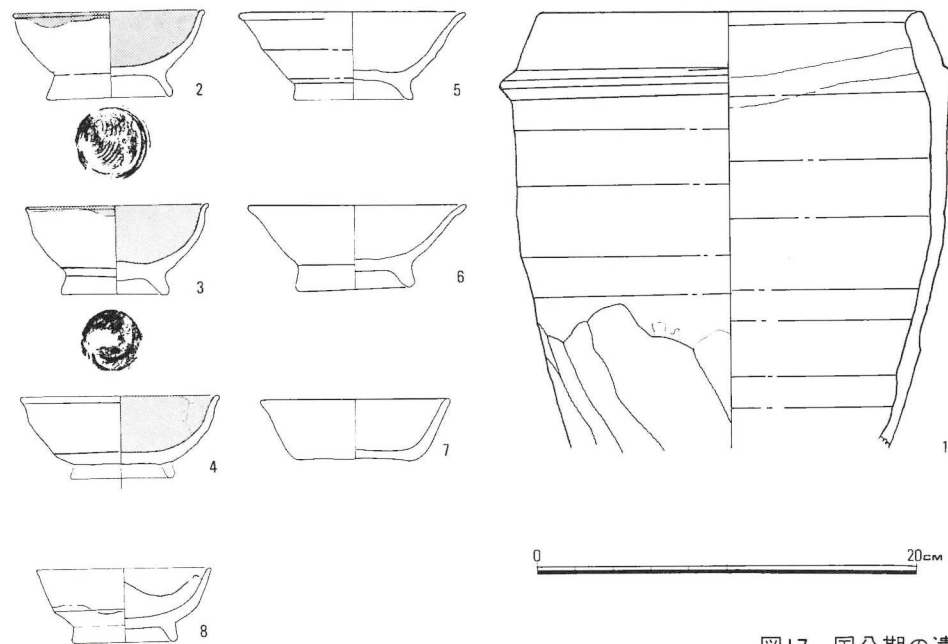


図17 国分期の遺物

遺物

器種	図版番号	法 量	形 態 の 特 徴	外面の調整の特徴	内面の調整の特徴	備 考
羽釜	図17-1 写真 14-1	口径 20.0cm	・内湾する口縁部 ・ツバは丸く低くつく	・胴上半以上はロクロミズビキ ・胴下半ミズビキの後、ナナメヘラケズリ	・ロクロミズビキ	・灰黄褐色 ・砂粒・長石粒含む ・口縁部内面、黒色に変化した帯 ・第2号住居址カマド出土
高台付碗	図17-2 写真 14-2	口径 10.5cm 高さ 4.6cm	・丸く内湾する体部 ・付け高台	・ロクロミズビキ	・ロクロミズビキ ヘラミガキ	・淡褐色 ・砂粒・赤色粒少量含む ・黒色土師器 ・23-24-4 No. 5
高台付碗	図17-1 写真 14-3	口径 9.7cm 高さ 4.8cm	・丸く内湾する体部 ・端部は外へ肥厚 ・付け高台	・ロクロミズビキ	・ロクロミズビキ	・淡褐色 ・砂粒・赤色粒含む ・黒色土師器 ・23-24-4 No. 4
高台付碗	図17-4 写真 14-4	口径 10.5cm 現高 3.6cm	・内湾する体部	・ロクロミズビキ	・ロクロミズビキ	・淡褐色 ・砂粒・赤色粒少量含む ・黒色土師器 ・23-24-4 No. 6
高台付碗	図17-5 写真 14-5	口径 11.9cm 高さ 4.6cm	・外反する体部	・ロクロミズビキ	・ロクロミズビキ	・灰白色 ・砂粒を含む ・須恵器 ・23-24-4 No. 8
高台付碗	図17-6 写真 14-6	口径 11.4cm 高さ 4.5cm	・外反する体部	・ロクロミズビキ	・ロクロミズビキ	・灰褐色 ・砂粒を含む ・須恵器 ・23-24-4 No. 9
碗	図17-7 写真14-7	口径 10cm弱 高さ 3.1cm	・平らな底部からまっすぐ立ち上がる体部	・ロクロミズビキ	・ロクロミズビキ	・褐色 ・砂粒多量に含む ・23-24-4 No. 7
高台付碗	図17-8 写真 14-8	口径 9.2cm 高さ 3.9cm	・二段の体部	・ロクロミズビキ	・ロクロミズビキ	・灰白色 ・灰釉陶器 ・第115号住居址No. 1



写真14 国分期の遺物



写真15 23-24-4 遺物出土状態



写真16 第2号住居址遺物出土状態

小 結

本址は、3.10m×2.95mと規模は小型化しており、本遺跡のこの時期の住居の典型である。国分期の住居址が確認された全住居址の3分の1以上を占めていることは、本遺跡の特徴でもある。黒色土中に構築されているものも数多く存在し、国分期の住居址の切り合い関係も随所で認められ、多い所では3基の切り合いが確認された。しかもこれらの住居はさほど時期的差異が認められなかった。

遺物としては、この時期の住居のほとんどで羽釜及び糸切り底を持つ坏の破片が出土した。代表的なものとして、第2号住居址の羽釜と、一括で検出された高台付碗をあ

げたが、羽釜の型態は、長野地方でみられる口縁部の直立したものは無く、群馬から埼玉にかけて出土している、口縁部がやや内湾し、つばの型態がバラエティーに富んだものが多かった。

以上、出土土器等から考えて、本遺跡の国分期の住居は、10世紀後半から11世紀の構築と考えられる。

(飯塚)

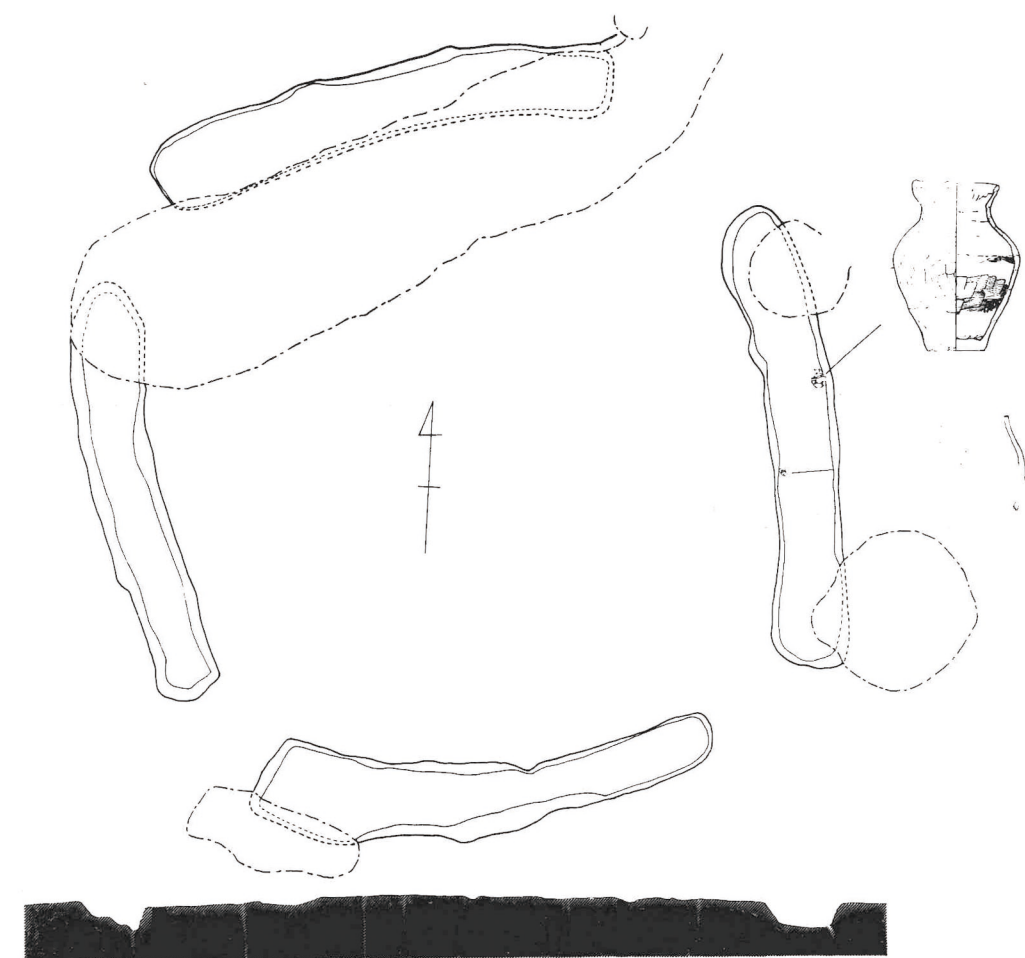
(2) 墳墓と出土遺物

第8号方形周溝墓

本周溝墓(図18)は、B区南、18-13、18-14、19-13、19-14区に位置する。

西側と北側の溝は、第6号方形周溝墓の南側の溝に切られ、東溝は第230号住居に切られている。

平面形は、4本の独立した溝に囲まれており、南・西・北、の各溝は内側に湾曲しているも



0 1 2 3 4 5m

図18 第8号方形周溝墓実測図

の、軸線はほぼ直角に交わる。南北の中軸線は、N-19°-Wで、東溝は北側が中軸線よりも9°東に傾いている。中軸線の長さは南北が10.20 m、東西が9.60 mで、わずかに南北が長い長方形を呈し、小型の周溝墓である。

北溝は、第6号方形周溝墓に切られているため、長さ、幅ともに確認できなかったが、平面形からして他の溝と大きな差異は無いと考えられる。深さは確認面より25cm程掘り込まれている。

西溝は、北溝の一部をやはり第6号方形周溝墓に切られているので、長さは確認できなかった。上幅は80cm程で、下幅は50cm程である。深さは25cmである。

南溝は、長さ6.05 m、幅は70cm～1.06 mまで一定していない。この溝は、南西の隅を玉類の出土した土壇によって切られている。

東溝は北の一部が第230号住居址（国分期）の下から検出された。長さは6.20 mで、上幅90 cm、下幅70 cmで、深さは30 cm程で他の3本の溝よりもやや深くなっている。4本の溝の断面形態は、内側、外側ともに外反するが鋭く掘り込まれている。

遺物は東溝の掘り方面より5 cm程浮いた黒色土中から、1個体の土器（図19-1）と、破片（図19-2）が出土した。

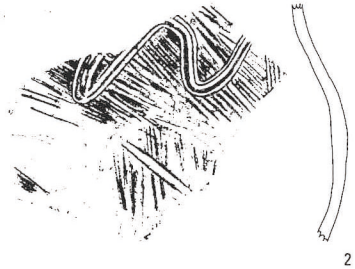
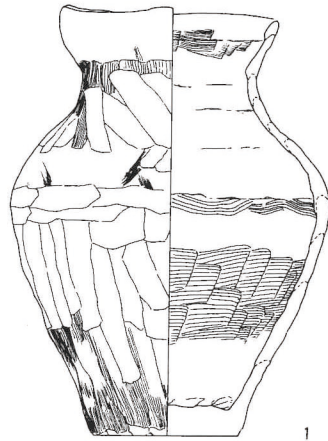
耕作による削平が深いため、周溝の区画内からは主体部となるような遺溝は検出されなかった。（五十嵐）



写真17 第8号方形周溝墓全景(北東より)

遺物

器種	図版番号	法 量	形 態 の 特 徴	外面の調整の特徴	内面の調整の特徴	備 考
壺	図19-1 写真18	口 径 11.3cm 最大径 16.8cm 器 高 22.6cm	・受け口状の口径をもち内湾している。端部は部分的に内側の肥厚している。 ・胴上半に最大径をもつ	・頸部と胴下半部は、浅いハケメの後、左上ナナメヘラケズリ、胴上半部ヨコヘラケズリ ・口縁部ヨコナデ	・口縁部・胴下半などヨコハケメ	・淡褐色 ・砂粒・長石粒・赤石粒を含む
甕	図19-2		・ゆるく屈曲する頸部から胴部	・ナナメハケメの後、振幅の大きな3条単仕の波状文	・ヘラナデ	・淡褐色 ・砂粒を含む ・外面にスス付着



0 10cm

図19 第8号方形周溝墓出土土器

小 結

本周溝墓の時期は、東溝より出土した2個体の土器によって知ることができる。

1の壺は、類例が乏しく時期決定はむずかしいが、受け口状の口縁や器形などから、弥生時代中期後半から後期初頭に位置づけたい。

2の甕は、破片ではあるが特徴的な波状文をもつ。これは、荒砥前原遺跡⁽¹⁾や埼玉県北部の用土・平遺跡⁽²⁾などの類例があり中期後半に位置づけたい。

以上のように、本周溝墓出土の土器は弥生中期後半から後期初頭という時期である。



写真18 第8号方形周溝墓出土土器

本周溝墓と同じ4本の溝が独立した状態を示すのは第10号周溝墓があるが一部だけの調査であり、明確な遺物の出土はなかった。他に可能性のあるのが、4月の補足調査の時、検出した溝である。これは、第10号墓の北に平行するように位置していたが遺物の出土はなかった。このように、本遺跡では、4本の溝が独立した状態をとるのが、2基ないし3基検出できたが、他にも調査区域外に存在する可能性がある。しかし段丘崖がせまっているので、それほど多くの数は考えられない。

日高遺跡では、3基ないしは5基の同一形態の周溝墓が調査されている。⁽³⁾

南関東地方では、中期後半宮ノ台期に爆発的に遺跡が急増しており、それと強い関連をもってこの形態の周溝墓が出現することはすでに説かれている。⁽⁴⁾しかし、本地域と土器型式において密接な関連のある長野地方にこの時期の周溝墓が認められないことから、この形態の周溝墓は南から北へ伝播したと推考する。⁽⁵⁾また後期になると櫛描文系の土器や吉ヶ谷式土器が横浜地方まで分布を広げており時期差はあるが、両者に何らかの関係が認められよう。

しかもその本貫地域ともいえる神奈川県歳勝土遺跡では25基、千葉県南総中遺跡では14基と本遺跡・日高遺跡とは数の上で大きな差があり、農耕社会の成熟度の違いや農業経営規模の違いが表われている。この差こそ、櫛描文系の土器が遠く横浜地方までおよんでいる大きな原因であると推考したい。それは対の関係というよりも、実態は不明ながらも強者・弱者の関係に近いかもしれない。⁽⁹⁾

横道にそれたが、いずれにしてもこの周溝墓が農耕社会の産物であることは確実であり四本の溝が独立する周溝墓が検出された、意義は深い。(田口)

註

- (1) 平野進一「群馬県荒砥前原遺跡」『信濃』28-4 1976年
- (2) 曾野寿彦・吉田章一郎「有角石斧を出した埼玉県の弥生式遺跡」『歴史と文化II』1957年
- (3) 平野進一「高崎市日高遺跡の弥生社会について」『上州路』No.47 1978年
- (4) 田中義昭「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』87 1976年
- (5) 宮坂光昭「信濃における周溝墓と古式古墳」『信濃』29-4 1977年
- (6) 埼玉県西部の花影・駒堀・霞ヶ関遺跡等でも、検出されており、吉ヶ谷式土器を伴っている。伝播のルートが想定できる。
- (7) 坂本彰 他『歳勝土』1975年
- (8) 斎藤吉弘「南総中遺跡発掘調査概報」『先史』8 1972年
- (9) 櫛描文系土器の一方向的動きであり、甕が圧倒的に多いということも注目しなくてはならない。吉ヶ谷式土器にも同様なことがいえよう。このような一方向的な人の流れる先、横浜の丘陵地帯は初期の農耕社会のセンター的役割をしていたのであろう。

第4号方形周溝墓

本周溝墓は、圃場整備事業の都合により、西側3分の1を残して77年度の調査を打ち切り、78年度早々に残りを調査した。

B区東側中央、14-8、14-9、15-8、15-9区に位置し、規模は、台状部分の南北が11.8m、東西が10.6mで、溝の外側を含めた最大長は南北が19.4m、東西が13.8mである。主軸方向はN-32°-Wである。

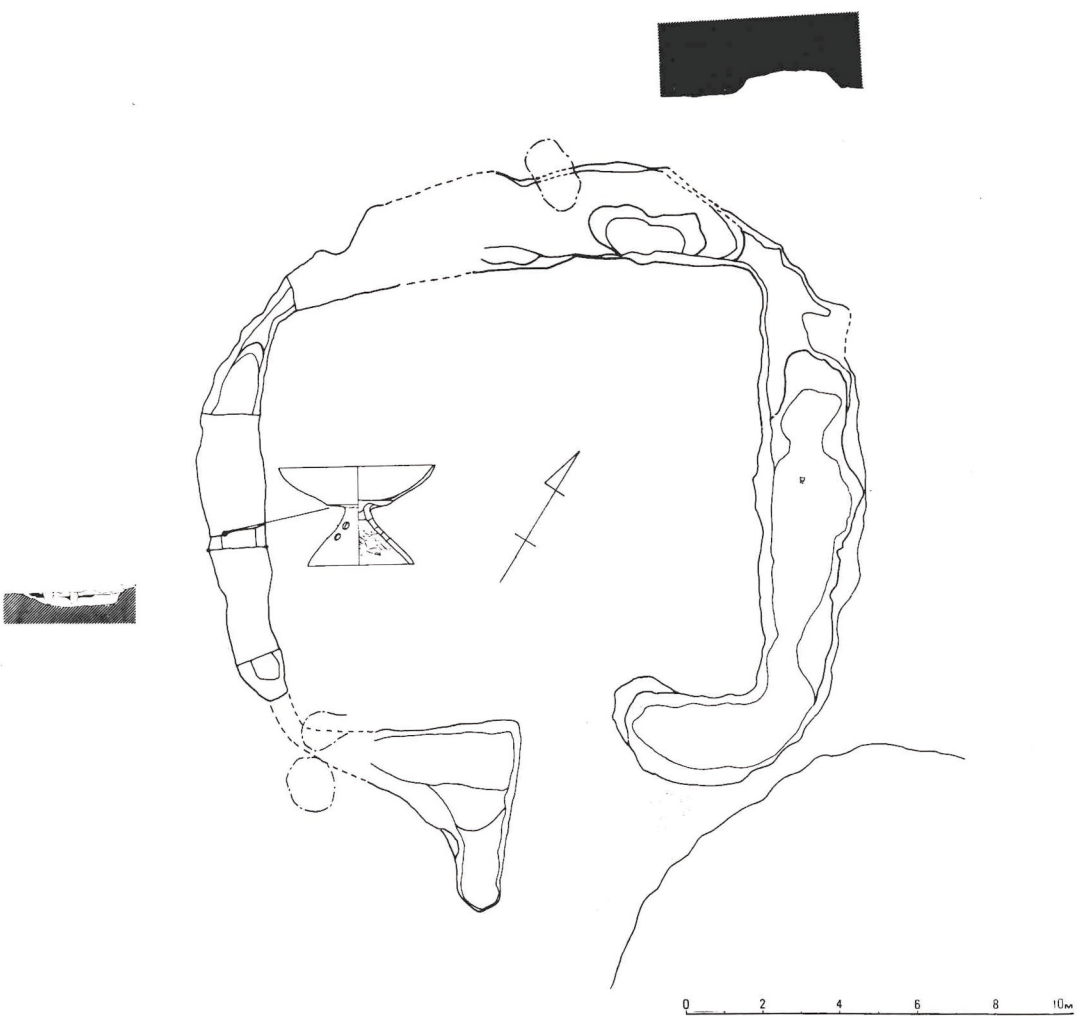


図20 第4号方形周溝墓実測図（土層断面黒の部分は○軽石層）

本址（図20）は、南側中央部が2.5 mの間隔で掘り残され、南西部分の周溝は台状部の上幅からさらに4.8 mの長さで中軸線よりE-8°Wの方向に伸び、特異の形態を示している。この溝は、緩やかな傾斜をもって南から北へ落ち込み、南西隅へ続いている。南東の隅を除いた3つの隅はフラットに立ち上がり、溝幅はわずかに狭くなるが、深さにそれほど変化は無い。

溝は、深さを西溝が50cmの他、北・東・南東・南西いずれも60cmとあまり変化しないが、最大幅は、東溝2.86m、北溝2.40m、西溝1.70mと差が認められる。いずれも内側は垂直に近い掘り方を示すが、外側はややなだらかに掘り込まれている。

本址の溝の標準的な覆土は、ローム粒子とロームブロックを多量に含んだ褐色土が上層部を埋め、その下に浅間山噴出のC軽石が5 cm程の厚さで堆積し、さらにその下に褐色土が堆積している。

遺物は、C軽石の下で、弥生時代後期の土器片がまばらに出土し、C軽石の直上で東溝中央で小型壺、西溝中央で高坏（図21）がそれぞれ出土している。この2点は石田川式土器である。

（五十嵐）



写真19 第4号方形周溝墓全景(東より)

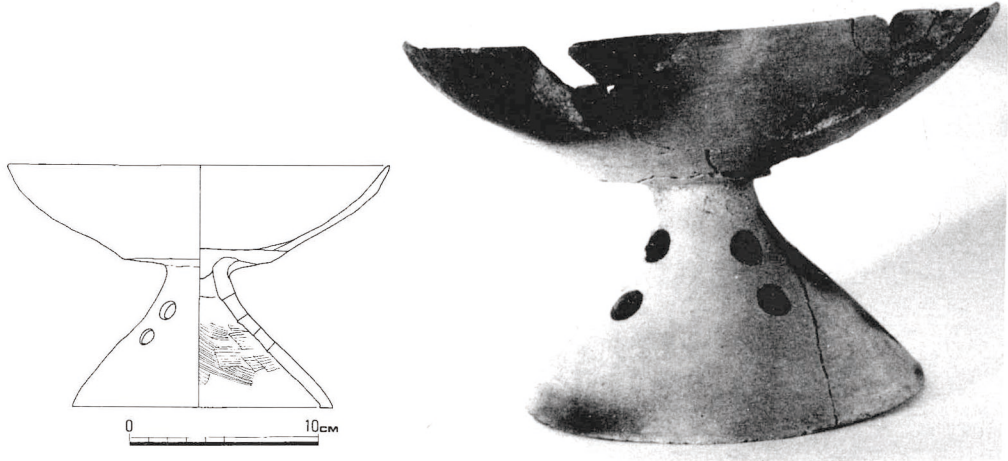


図21 第4号方形周溝墓出土土器

写真20 第4号方形周溝墓出土土器

器種	図版番号	法 量	形 態 と 特 徴	外面の調整の特徴	内面の調整の特徴	備 考
高 坏	図 21 写 真 20	口 径 20.2cm 器 高 12.8cm	・坏体部は、外反し低く開き、端部で内湾してたつ ・脚部も、中ごろから内湾ぎみに接地する	・坏部ヨコヘラミガキ ・脚上半部ヨコヘラミガキ・下半部タテヘラミガキ	・坏体部ヨコヘラミガキ・底部一方方向ヘラミガキ ・脚部、部分的にヨコハケメ	・白褐色 ・砂粒少 ・土器製作時の接合は、坏体部・坏底部・脚部の3つの部分に分かれ、坏底部は脚との接合にボソをもちい、外から補強、坏底部と坏体部は内から補強

小 結

本周溝墓は、周溝内の底面より20～30cmのところに、C軽石層の堆積が認められた。C軽石下の遺物は、弥生後期の小破片だけで、C軽石直上には、西溝では高坏、東溝では小型壺が出土している。残念ながら小型壺は現在紛失したためふれることはできない。高坏は、弱く内湾する脚をもち、胎土・焼成なども考え合わせると、石田川式土器の3期分類のⅠ期にあたるものであろう。しかし、この土器は、本周溝墓築造時の遺物ではなく、より築造時に近い遺物はC軽石下の小破片であり、築造時期は弥生後期末ということになる。

しかし、C軽石降下後に土器が意識的に溝に入れており、しかも1点ずつであり、墓への意識があったことがいえよう。同様の出土状態は、南に隣接する第11号墓にも認められた、重要な事例である。

他にC軽石層が検出されたのは、北に隣接する第5号墓の1基で、第2・3・11号墓の3基は、本周溝墓のC軽石下の土層の堆積に類似している。本周溝墓を含めた、5基が築造時期が近いといえよう。

本周溝墓は、特異な平面状態をしている。南側中央が切れ、西側の溝はあたかも前方後方状

に伸びるが、除々に立ち上がってしまう。

第11号墓も同様の形態を示し、どちらも弥生期の築造でもあり、極めて重要な問題を含んでおり、今後検討していきたい。

(田口)

第1号方形周溝墓

A区の南に、28-24、28-25、29-23、29-24、29-25、30-23、30-24、30-25区に位置する。

東溝が12号住居址を切り、北東隅を5号墳北溝と30号住居址に切られ、他にも数々の新しい時期の遺構に切られている。

耕作のためか、主体部は発見されず、盛土も削られているようである。

主軸はN-66°-Eであるが、これは後述するように西側を正面とした場合である。

長辺の南北は、周溝外側で23.00 m、内側で21.60 m、東西は外側19.60 m内側で14.60 mを計測し、南北に長い長方形のプランである。

南北東の三方の溝は、いずれも中心付近で外側で立ち上がりがふくらみ深くなる形態になりせまくなる。西側は他と異なり中心部が浅く狭くなり、西側がふくらみ深くなる形態をとる。類例は埼玉県塚本山33号墓があり、前方後方墳を意識したものにとらえておく。



写真21 第1号方形周溝墓全景(東より)

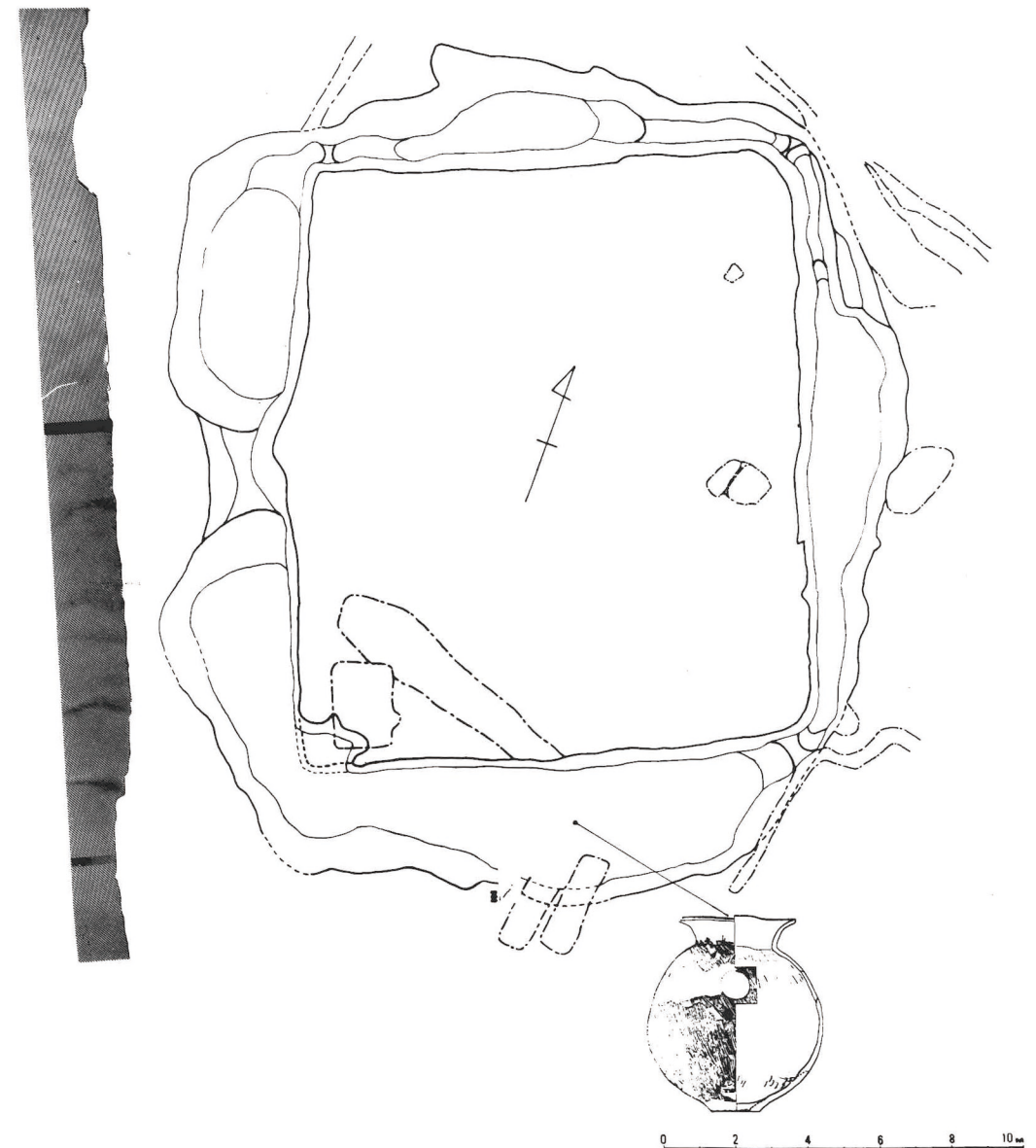


図22 第1号方形周溝墓実測図

周溝の断面形態は、各溝とも、拡がった部分では内側が垂直に近く、外側はなだらかな傾斜である。隅部近くの狭い部分では、外側の傾斜も急になる傾向がある。

周溝内の堆積土は、最下層にロームブロックまじりの褐色土が内側より入り込んでおりその上層を黒色土層であるが二層に分かれ、下層では炭化物の混入が認められた。

遺物の出土状態

全て溝内からの出土である。

東溝より出土した1点の褐色製の管玉を除き、古式土師器類が主であったが、こぶし大から頭大の礫が点々と認められ、中には火を受けたものもあった。

周溝の形態で他と異なった西溝では、遺物の量は極端に少なく、ほとんどが他の三溝から出土している。

南溝中央より出土した壺（No.1）以外は全て黒色土層中であり、完形品も多数含まれている。上層からの遺物の出土状態は、他の6・7・9号の石田川期の墳墓も同様である。遺物の整理が終了していないため、量、組成等不明な点が多いが、調査時の観察では、S字状口縁台付甕が多く、ほとんど全ての器種を網羅していたようであり、その数は100点以上となろう。

（田口）

遺物

器種	図版番号	法 量	形 態 の 特 徴	外面の調整の特徴	内面の調整の特徴	備 考
壺	図23-1 写真22	口 径 16.5cm 最大径 24 cm 器 高 27 cm	・やや下膨らみで球形に近い胴部と二段に外反する口縁部 ・胴上半部に焼成後外からの穿孔	・口縁部ヨコナデ ・胴部左上ナメハケメであるが胴上半は部分的に右上ナメハケメで、縦歯文状となる ・胴下半、部分的にヨコハケメ	・口縁部ヨコナデ ・胴上半、ユビによるオサエ ・胴上半は部分的にヨコヘラナデ ・下半はナメヘラナデ	・灰褐色 ・砂粒含む ・底部はやや上げ底であり、底部は後に充填されている。底部輪台技法か ・胴部穿孔土器

第1号墓及び第7号墓は、遺物の量が多く、ほとんど整理に手がついていない。今回の報告は完形で出土したものを図化した。遺物の観察・写真は、後日の正式報告に一括で載せたい。第1号墓の図23-1の土器だけは、遺構に直接的な関係をもつと考えられ例外とした。

（田口）



写真22 第1号方形周溝墓出土土器

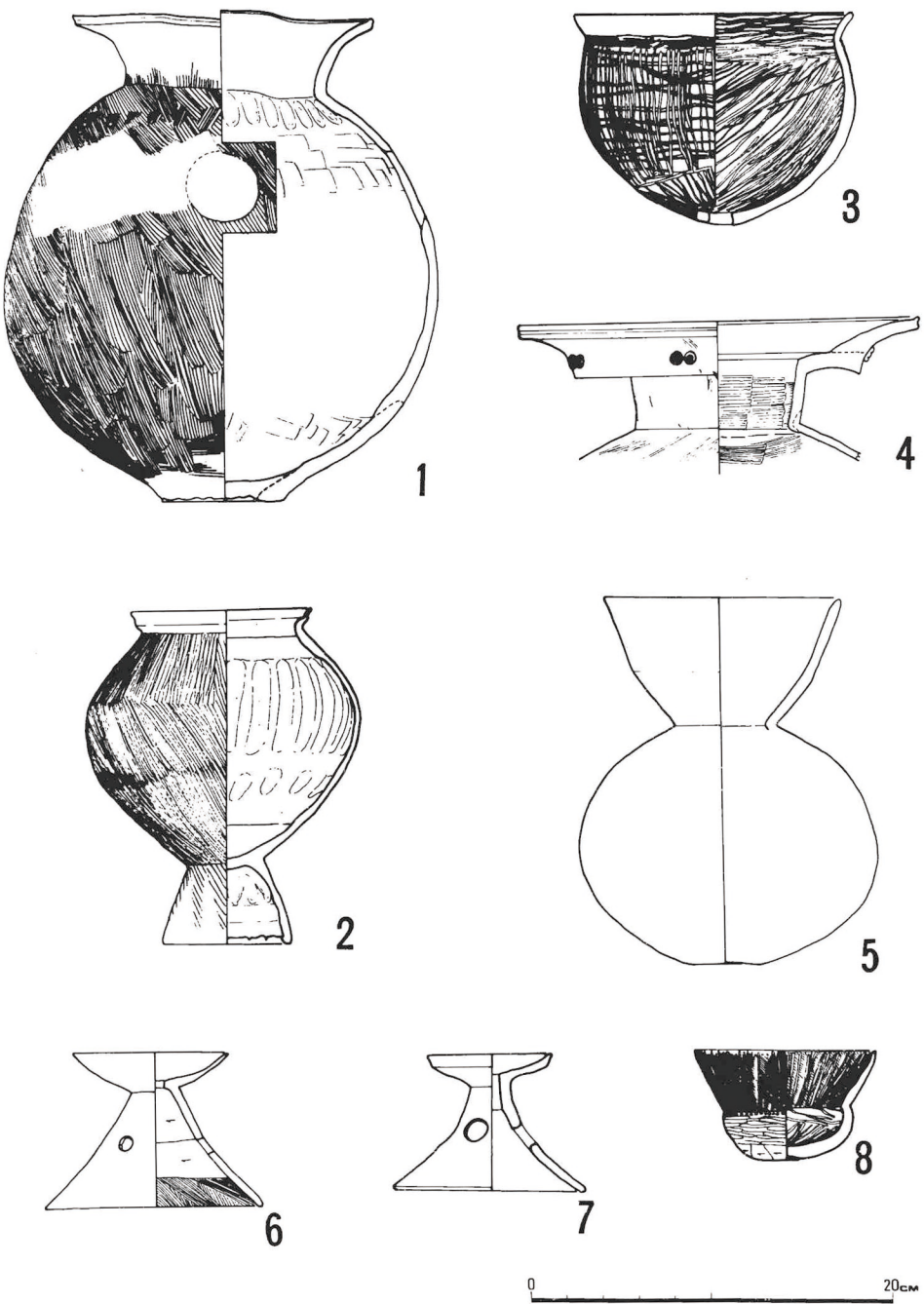


図23 第1号方形周溝墓出土土器 実測図

1号 小 結

最後に溝の形態を若干考察したい。

本址の築造時は、周溝底面につく土器が1点だけでもあり、断定し難いが、調査時の観察では上層の土器など、その時間差は少ないようである。石田川式土器を3期に細分すれば、第II期に含まれ、4世紀末までには築造されていたとしておきたい。

溝の形態で中ぶくらみになるのは下郷遺跡でも指摘されている。

南北東の三溝が中心部近くで外側に張るということは前記した通りであるが、ここで注目したいのは、隅部近くの直線的で浅い部分である。直線的な部分は、巾の数値も近く・深さの変化も少なく、それぞれの直線部を延長するとほぼ内側に平行し整ったプランとなり、これが本来的な、当初の計画ラインではないかと考えたい。

外側へふくらむ部分は、築造途中で拡張、または掘り下げられたものであろう。埋葬施設の規模、あるいは追葬時に足りない土を補う、さらに盛土としての視覚的配慮等で随時拡張されたものと推察したい。

(田口)



写真23 第1号方形周溝墓東溝遺物出土状態



第7号周溝墓

本址は、B区中央14-10、14-11、14-12、15-10、15-11、15-12、16-11区に位置している。

主軸はS-18°-Wを向き、段丘に直交する。

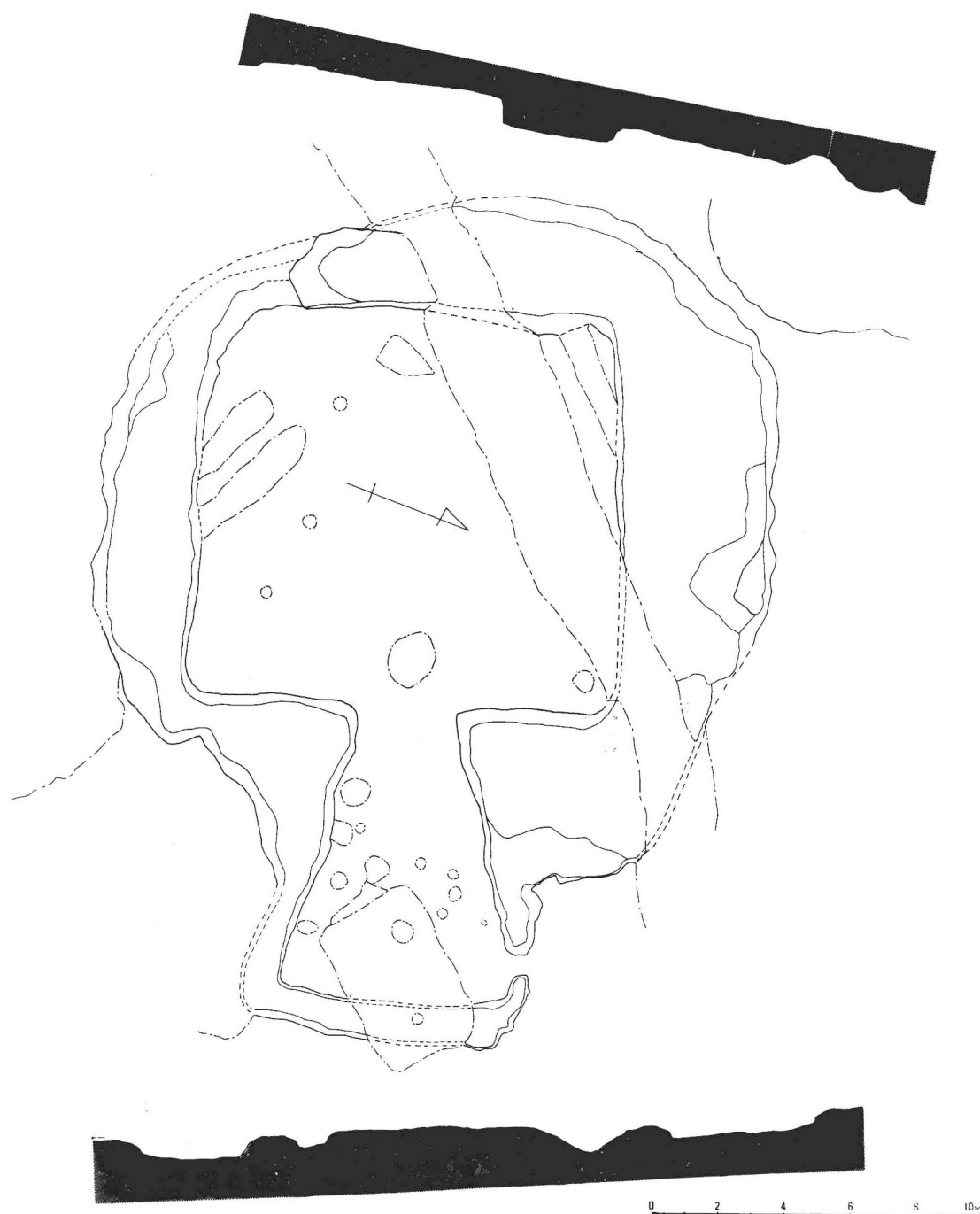
遺構の規模は次のようである。

全 長 (周溝外側)	25.50 m
墳 丘 長 (周溝内側)	21.00 m
前 方 部 長	8.70 m
前 方 部 巾	6.90 m
くびれ部巾	3.10 m
後方部東辺	12.50 m
〃 西辺	11.50 m
〃 南辺	11.60 m
〃 北辺	11.70 m

以上の計測値が得られた。



写真24 第7号周溝墓全景(東より)



周溝内側は整然としたプランを示しており、墳丘長と前方部長の比率は2.4：1で前方部長は長く前方部巾も狭く、前期古墳の特徴を示している。後方部からくびれ部にかけての周溝外側のラインは、不定形で、北が最も広く4.60mを計る。前方部周溝は1m前後の巾で、相似形にまわり、北東の隅近くでブリッジをもっている。

南西隅で、11号周溝墓を切り、北西隅では4号周溝墓に接している。前方部は鬼高期の158号、国分期の159号住居址によって切られており、墳丘の存在がなかったものとして推察できるが、南に位置する7世紀代の1号墳の周溝は、くびれ部近くで立ち上がって接しており、切り合い関係はない。

盛土は、調査時では認められなかった。前方部では、周溝規模が小さいことと、6世紀代の158号住居址によって切られていることにより盛土はあったとしてもわずかであったであろう。後方部の周溝内では内側より多量のロームブロックまじりの土が流れ込んでおり、盛土は、同溝がくびれ部直前で立ち上がることから、7世紀代に、まだ盛土が存在し、墳丘としての意識があったといえよう。

遺物の出土状態

出土遺物は周溝内より出土した、数十個体以上の土器のみである。古式土師器が大部分であったが、弥生後期の土器も少量出土している。

両くびれ部と、後方部北側が最も出土量が多く、後方部南でもまとまって出土している。それらほとんどの遺物は、墳丘がくずれ落ちたロームブロックまじりの土層の後に推積した黒色土中からの出土であり、構築時直後の遺物は極めて少ないようである。

(田口)

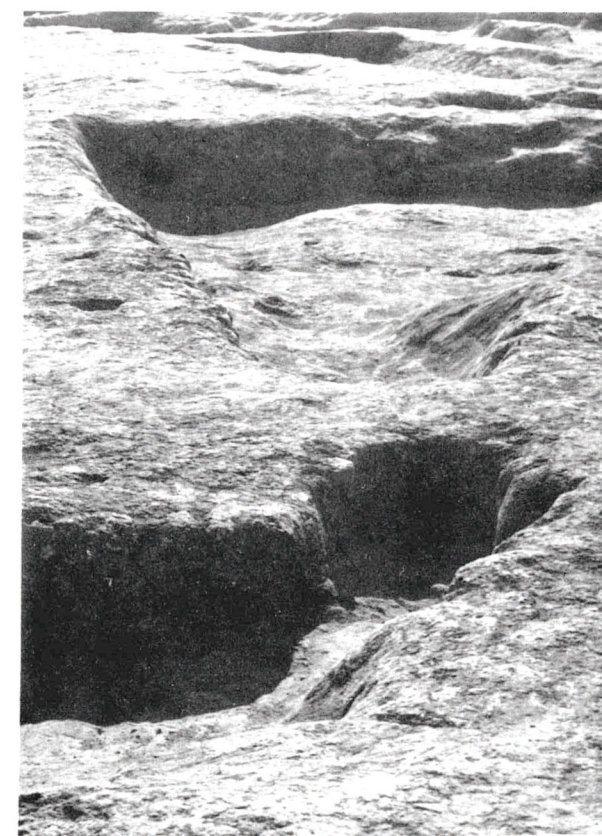


写真25 第7号周溝墓北東くびれ部(東より)

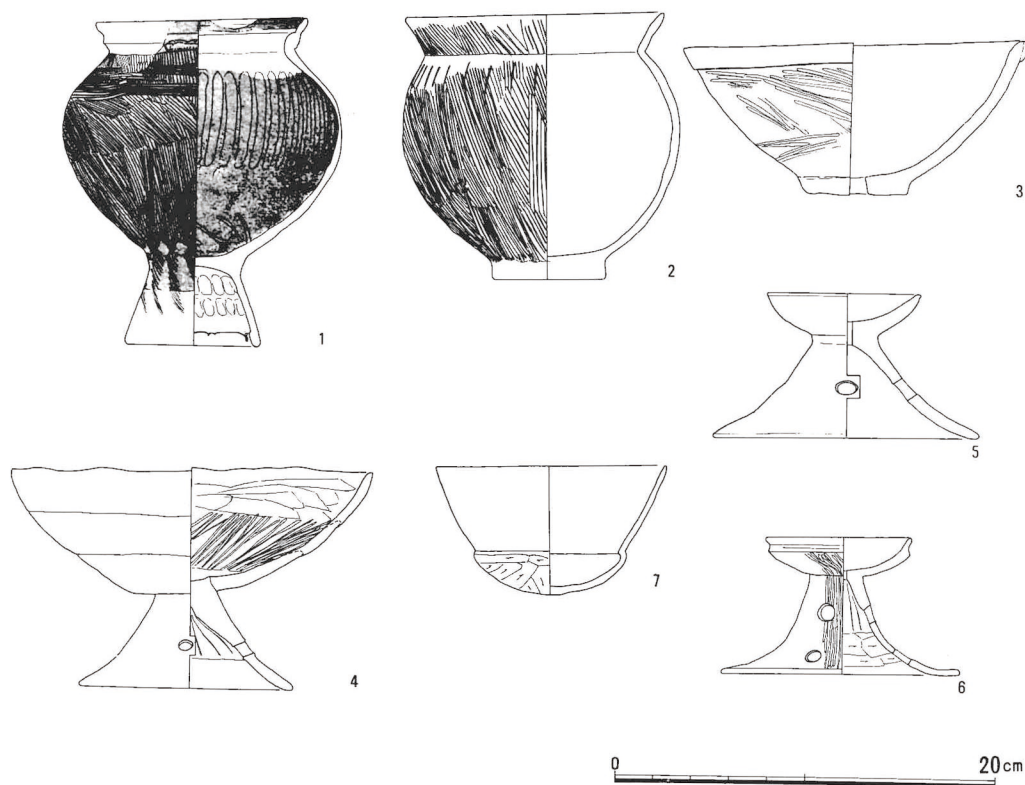


図25 第7号周溝墓出土土器実測図

第7号周溝墓 小 結

本址は、第1・6・9号墓と同様に周溝内から多量の土器が出土している。そのほとんどが上層からの出土であり、多くの遺物が未整理の段階で正確な築造時期の決定はできないが、上層の土器はほとんどが石田川期に属し、本址の築造時期も大きくはずれることは無い。

本址の平面プランは、前方後方形を呈しており、このような小形の前方後方形の墳墓は前方後方墳であるか、前方後方型周溝墓であるのかは見解の分れるところである。

現に、報告例でも二者に分れており、古墳と周溝墓の概念規定が問い直されている。すでに10基以上の検出例があるが、時期は4 C～5 Cで、他の方形墳墓と群集形態をとり、規模は、後方部の辺では方形周溝墓並のことが多い。ここでは、報告されたものについての若干の検討を試みた。

まず分布であるが、群馬県・埼玉県地方に5基、千葉県地方に6基が管見にふれた例である。

遺 構 名	所 在 地	規 模 (内径全長)	平 面 形 態	出 土 遺 物	立 地	同時期集落と の 関 連	同時期墳墓との関連	文 献
鈴ノ宮7号墓	群馬県高崎市	21 m	・前方部右隅ブリッジ	・周溝より多量の土器	河岸段丘上	接 続	・3基の方形周溝墓 ・土 壇	
下 佐 野 I	群馬県高崎市	(全長?) 約30m	・前方部両隅ブリッジ	・くびれ部内側より 小型内行花文鏡 ・後方部周溝よりガラス玉1 ・周溝より土器	河岸段丘上	接 続	・5基以上の方形周溝墓群	1
流通団地内	群馬県佐波郡東村			・周溝より土器	台地の縁	分 離	・8基以上の方形周溝墓群	2
下郷10号古墳	群馬県佐波郡玉村町	42 m	・長方形周溝	・周溝より埴輪質土器類	河岸段丘上	分 離	・20基以上の方形周溝墓群 ・後続する古墳 ・土壇群・直輪棺	3
石蔵B・8号墓	埼玉県大里郡岡部町	22.93m	・前方部右隅ブリッジ	・東溝より台付甕・埴	低古地の縁	分 離 ・4基の住居が周囲にあるが集落とは考えられない	・11基の方形周溝墓	4
東間部多2号墳	千葉県市原市	35.5m	・前方部右隅ブリッジ	・周溝より土器	台地の縁	隣 接	・後続する8基の方形墳墓群 ・1基の円墳	5
東間部多16号墳	千葉県市原市	全長26.5m	・長方形に近い周溝	・周溝より土器	台地上	接 続	・1基先行する方形周溝墓	6
諏訪台33号墳	千葉県市原市	17.8m	・前方部右隅ブリッジ	・周溝より1点土器	台地の縁	隣 接	・周囲は古墳群	7
阿玉台北 007号墳	千葉県香取郡小見川町	25.5m		・周溝より土器	台 地 上	接 続	・3基の方形周溝墓 ・1基の方形周溝遺構	8
飯合作2号墳	千葉県佐倉市	約30m	・2基の方墳に接続 ・方墳は、5基の方形周溝墓が接続	・周溝より土器	台 地 上	接 続	・方形墳墓が7基接続 ・他に1号墳と方形周溝墓18基	9
飯合作1号墳	千葉県佐倉市			・木棺内よりガラス玉3	台 地 上	接 続	・上を参照	9

この中から、古墳的要素を抽出すると、「全ての平面形態」・「下佐野の内行花文鏡の出土」・「下郷10号墳の埴輪質の土器」である。これらの出自は、いずれも自生的とはいいい難く、外来的要素である。

一方、周溝墓的要素は、「規模」・「鈴ノ宮7号墓のような土器の出土状態」・「集落との関連」・「方形墳墓との群集性」である。この中でも特に、後の2点は、被葬者の性格を知るうえで重要である。この「集落との関連」では2つに大きく分類できる。Iは、集落に接続、あるいは集落内に存在するもので、IIは、特定の集落とは離れて位置している。さらに、「方形墳墓との群集」の規模、あるいは分布状態によっても二分できる。aは、1～5基ほどが散開して分布している。bは基数が多く、規則的な配置を示している。

以上、2つの分類をあわせて若干の検討を加えてみたい。

I a は、鈴ノ森・東間部多16号・阿玉台北がその例である。被葬者は、それぞれの集落の統率者、あるいはその家族等があてられ、所属集団の紐帯が強いため、集落に接して存在するのである。方形墳墓も、その系列に組み込める。

I b は、飯合作がその例である。下佐野もその可能性がある。正式報告が出ていないため、不明な点が多いが、被葬者の性格は I a と同様であろう。

II a は、東間部多2号がその例であり、諏訪台もその可能性が強い。東間部多2号は、I a の東間部多16号からの系列が報告者によって指摘されている。これは、集落の紐帯を絶ち切ったことを表しており、より古墳的様相を強めている。

II b は、流通団地内・下郷・石蒔Bがその例である。これらの遺跡は特定の集落の墓域ではなく、さらに広い地域の複数の集落の墓域と考えられ、それぞれの墳墓の被葬者は、それらの統率者、あるいは、その中での有力者とみてよい。特に下郷では、規模も大きく、すぐ後続する時期に大型前方後円墳があり、古墳というのにふさわしい。

以上、若干の検討を行ったが、石田川式あるいは五領式土器を使用の時期に、出現の契機は解明されていないながらも、外来的な動きにより築造されたこれらの墳墓は、鈴ノ宮7号のように集落の統率者で族長層を被葬者とするものや、下郷10号墳のように、さらに大きな地域集団の長、首長層を被葬者とするものなど、地域や遺跡、それぞれの性格によって、その展開が異っている。

今後、地域ごとの詳細な分析により、解明されることも多いであろう。 (田口)

参考文献

1. 飯塚卓二「下佐野 I 遺跡」『上越新幹線地域埋文調査概報Ⅳ』 1978年
2. 「伊勢崎・東流通団地内遺跡群」遺跡見学会のご案内 1978年
3. 巾隆之「下郷遺跡(第四次)」『関越道(新潟線)地域埋文調査概報Ⅳ』 1978年
4. 佐藤忠雄「石蒔B遺跡」『後榛沢遺跡群の調査』 1978年
5. 須田勉「東間部多2号墳」『東間部多古墳群』 1974年
6. 須田勉「蛇谷遺跡」『南向原』 1976年
7. 須田勉「諏訪台33号墳」『諏訪台古墳群調査概要』 1975年
8. 菊地真太郎「007号墳」『阿玉台北遺跡』 1975年
9. 沼沢豊「飯合作古墳群」『日本原始美術大系』6 1977年

※本項では、周溝が前方部を全周し、平面形態が前方後方形を示す例をあげた。本遺跡第4・11・

1号墓や、埼玉県塚本山33号墓・長野県田村原2号墓等は除外した。

第5号墳

本遺跡には、角閃石安山岩を使用した第1号墳をはじめとして、数基の古墳及び、古墳の残骸が存在していた。本墳(図26)は、その内の一基で、A区のやや東、27-24、27-25、28-24、28-25区に位置している。南西の部分が、第1方形周溝墓の北東コーナー部を切り込んで造られていた。

規模は、12.40m×12.60mの円墳で、すでに耕作により墳丘等はすべて削平され、ローム面

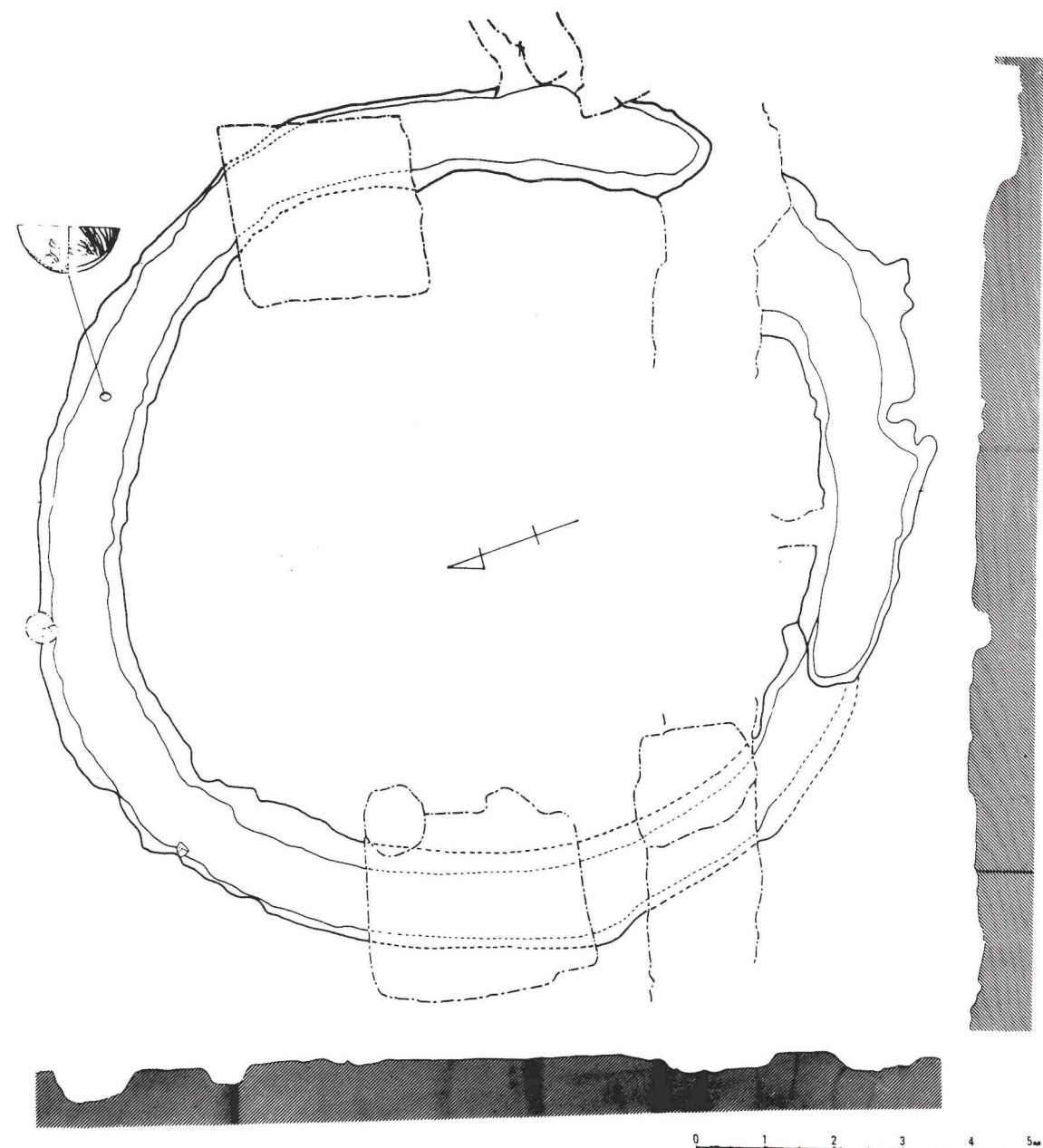


図26 第5号墳実測図

に周溝を残すのみであった。よって、主体部は確認されなかった。

周溝はほぼ一周しているが東側で、第64・62号（石田川期）、61号（国分期）の各住居址と重複関係にあり、西側で第31号住居址と重複関係にある。第61号、31号の各住居は、周溝上に乗った状態で確認された。

周溝の幅は、北側で、上幅1.30m、下幅1.0 m、南側で上幅1.5 m、下幅0.8 mで、若干の差で、それぞれなだらかな立ち上がりを示しているが、深さは、北側で45cm、南側で約30cm、東側で約50cm、と差が認められ、南側で浅くなっている。

周溝を埋める土層で、本墳の東西に存在する4号墳と6号墳と同様に、榛名山二ツ岳噴出の火山灰層であるFP'とみられる堆積が確認された。

遺物は、碗が1個体（図27）北側の周溝から出土したのみで、4号、6号墳でみられた埴輪は、本墳では検出されなかった。（飯塚）



写真26 第5号墳全景(北東より)

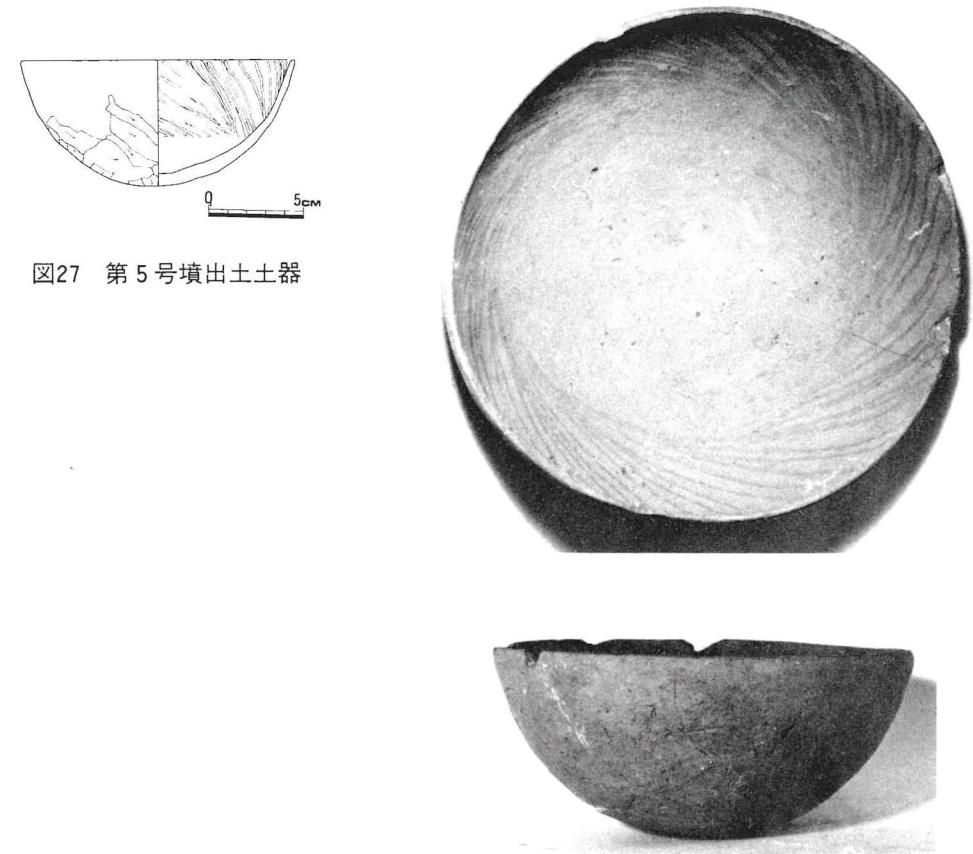


図27 第5号墳出土土器

写真27 第5号墳出土土器

遺 物						
器種	図版番号	法 量	形 態 の 特 徴	外面の調整の特徴	内面の調整の特徴	備 考
碗	図 - 27	口 径 14.4cm	・ほとんど変化ない半球形	・乾燥がすすんだ時点でのヘラケズリ、不定形でケズリの量が少ない。 ・口縁部ヨコナデ	・上半部左上ナナメヘラミガキ、 ・暗文	・濃赤褐色 ・砂粒を含む
	写真-27	器 高 6.6cm				

小 結

本墳の周溝内には、第4号墳・第6号墳と同様にFP'層が確認されている。

北側FP'下から出土した碗は、内面に石上斜めの暗文が施こされ5世紀からの伝統的な技法をもつ土器であり、この技法を用い、胎土・焼成も類似する土器群は、高崎地域に多く分布している。器種は坏・碗・高坏等の供献用の土器だけである。いずれも下限は、鬼高Ⅰ期までで

ある。

本墳の築造時期の下限も鬼高Ⅰ期までである。6世紀前半以前に築造されたとしたい。

(田口)

V ま と め

既述のように、今回の報告では、発掘調査の結果から、鈴ノ宮遺跡における各時期の代表的な遺構を取り上げたわけである。ほとんどの資料整理が今後に残されている状態であるので、詳細な考察を加えることはできないが、現時点で確認できた事項及び問題点をいくつか簡単に述べておきたい。

本遺跡出土の弥生式土器の中心は、くびれ部から肩にかけて櫛描文を施した樽式土器であるが、中期、及び竜見町式と思われる土器も何片か出土している。

櫛描文系の土器はほぼ2時期に分類可能と思われるが、前代の竜見町式土器、あるいは後出する石田川式土器との関連は、今後の課題である。

また、住居平面形が、長方形と小判形の2種類に分類でき、規模の面でもバラエティーがあり、詳細な時間差をふまえたうえでの検討が必要である。

この時期の墳墓としては、壺棺と方形周溝墓が確認できた。

4本の溝が独立した形態の第8号方形周溝墓は、今のところ県内で最も古い例と考えられる。また、C軽石を検出した第4号方形周溝墓は、弥生から古墳時代への移行期と火山噴出物との関連の解明の資料となるであろう。



写真28 第4号方形周溝墓溝断面



写真29 第4号・5号方形周溝墓遠景(北より)

古墳時代前期の出土土器は、いわゆる石田川式土器と呼ばれるS字状口縁台付甕を中心として、それに伴う土器が多量に検出された。

器形及び調整にかなり差異が認められ、細分することも可能である。

また、これらの土器は住居址よりもむしろ周溝墓からの出土が多く、その廃棄の実態も今後の検討の課題である。

この時期になると住居平面形は、方形か隅丸方形となるが、中に、長方形でS字甕だけ出土した住居址が存在していた。

墳墓として周溝墓、玉を出土した土壇、小規模石棺があげられる。

第7号方形周溝墓は前方後方状を呈し、本遺跡付近には前方後方墳として知られる將軍塚古墳が存在することから考えても、周溝墓とするか、古墳とするかは、今後の大きな課題である。

鬼高期の住居址検出例は、他の時期に比べて少なく。住居平面形は、ほとんど方形であるが、数例長方形と思われる住居址を検出した。時期は、1時期ではなく、分類されるが、今後の資料整理の結果にゆずりたい。

須恵器が何点か出土しているが、県内で焼かれたものと考えられ、今後地方における須恵器生産と、その供給の実態を解明する一資料となろう。

この時期の墳墓は、古墳が4基確認できたが、そのうち3基は周溝を残すのみであった。しかし、周溝内に堆積していたFP'は、火山噴出物と遺構の関連を考える上で、貴重な資料となろう。

残りの1基は、石室に角閃石安山岩の五面削り石を使用している横穴式古墳で、石室が胴張

りの円墳であることを確認した。石室の規模その他は不明である。

平安時代の住居址は、柱穴を持たない、小形長方形を呈するものがほとんどで、軒数も最高であった。

羽釜の出土例が多く、煮沸形態は羽釜が主体と考えられる。羽釜とともに、埴、高台付埴、灰釉陶器類が伴出し、非常に僅少ではあったが、縁釉陶器の破片も検出した。

確認できた住居の中で、1基ではあったがカマドに布目の丸瓦を使用した例があった。表面に、「大 伴家女」と窠描きの文字が認められ、焼成も良い瓦である。

以上の他、中世から近世にかけての井戸、館址と思われる堀、板碑などを検出したがこれらの検討は今後にまわしたい。

また、トレンチの調査ではあったが、関越自動車道のインターチェンジ予定地付近の水田からは、鬼高期の土器を出土した溝や、FP'を堆積させている溝、時代はくだるが、中世城郭とされている元島名城址に関係すると思われる濠址を検出している。元島名城に関しては、78年度に第2次調査として発掘調査を予定している。

以上、十分な資料整理も終了しないまま、簡単に確認事項・問題点を述べたが、今後の研究の一助となれば幸いである。。



写真30 文字瓦

(飯塚)

高崎市文化財調査報告書第4集
鈴ノ宮遺跡

昭和53年3月31日 印刷
昭和53年3月31日 発行

編集者 高崎市教育委員会
社会教育課文化財保護係

発行者 高崎市教育委員会
印刷所 進広堂印刷株式会社

